

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター  
所報

第10号 2009年6月



Newsletter  
of the  
Research Centre for Japanese Traditional Music  
Kyoto City University of Arts

No.10 June 2009

目 次

特集 廣瀬量平と日本伝統音楽研究 — 廣瀬量平初代所長をしのんで —	
はじめに .....	3
資料 .....	4
追悼講演 1 お別れの言葉 .....	梅原 猛 8
2 京都芸大と廣瀬量平 .....	潮江宏三 11
3 作曲家としての廣瀬先生 .....	中村典子 16
追悼エッセイ 1 廣瀬量平先生の思い出 .....	久保田敏子 17
2 日本伝統音楽の研究と先端的現代音楽の創造 — 廣瀬量平先生の秘めたる狙い — .....	吉川周平 21
3 三つの「縁」 — 追想“廣瀬量平” — .....	長廣比登志 23
4 《浮舟—水激る宇治の川辺に— 二十五絃箏のための 2002》について .....	野坂操壽 25
5 廣瀬先生との電話 .....	神戸愉樹美 26
でんおんエッセイ ひとさまの役にたつなんて .....	今田健太郎 28
客員研究員レポート .....	31
センターニュース .....	38
プロジェクト研究・共同研究の報告 .....	51
非常勤講師の研究報告 .....	59
専任教員の活動報告 .....	67
日本伝統音楽研究センター 概要 .....	81
編集後記 .....	85

特集

## 廣瀬量平と日本伝統音楽研究

—廣瀬量平初代所長をしのいで—

日本伝統音楽研究センター編

### はじめに

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの設立と運営に尽力された初代所長、廣瀬量平先生が、昨年(2008年)11月24日に亡くなりました。訃報を受け、2009年1月9日、「廣瀬量平先生をしのぶ会」(主催:同実行委員会・(財)京都市音楽芸術文化振興財団、7頁参照)が、京都コンサートホールでしめやかに行われました。

この特集は、しのぶ会で行われた講演の記録と、本研究センター関係者による追悼エッセイを収録することにより、廣瀬先生の業績を振り返りながら、日本伝統音楽研究の今後を考えていく目的で編まれたものです。

廣瀬先生が長年にわたって進められた日本伝統音楽に関する研究の成果は、数々の作曲作品(5頁参照)として結実していることは言うまでもありませんが、研究センター在職時の先生は、講演・講座・



研究対談なども活発に企画し実現されました。2001年3月の開所記念シンポジウム「今、なぜ日本伝統音楽か」(紀要『日本伝統音楽研究』第1号に収載)をはじめ、数々の公開講座の企画・司会やお話、そして2004年1月、退任を記念した公開講座では、作曲作品の演奏と講演(本報第5号に収載)を通じて日本伝統音楽の現在を考えるとという大きな仕事を果たされました。諸分野の第一人者と膝を突き合わせて行われた研究対談(本報第1～5号に収載)では、先生ならではの観点による音楽論・文化論が展開されています。

廣瀬先生の略歴と邦楽器作品一覧は、本報第5号に掲載されていますが、ここではあらたに、廣瀬周平氏(先生のご長男)に略歴を書いていただき、「主な受賞」「主要作品」「年譜」「(しのぶ会)次第」については、しのぶ会実行委員会が作成された配布物から転載させていただきました。原稿の執筆・掲載の快諾をいただいた先生方、資料や写真の転載を許されたご遺族およびしのぶ会実行委員会の皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。

(竹内有一)

## 廣瀬 量平 (1930-2008)

1930年函館生まれ。市内老舗レストラン「五島軒」が生家。日本で初めて西洋船を造った、<sup>つづきとよし</sup>統豊治を先祖に持つ。1953年北海道大学教育学部を新制一期生として卒業後、東京藝術大学音楽学部作曲科に入学。1961年同大学専攻科修了。池内友次郎に師事した。専攻科在学中より本格的な作曲活動に入る。

はじめは西洋音楽を徹底的に学んだが、邦楽、民族音楽、アジア音楽、古代にあったであろう音楽とその視座を広げ、作曲活動を展開する。自ら「音楽とはコミュニケーションであり、独りよがりではいけない」と言うように、普遍的問題、さらには取り巻く社会や現実をも包み込んだ上で、熟練した作曲技術で作品が提示される。その一方で、舞台、映画、放送、劇判、コマーシャル音楽などを手がけ、多くの親しみやすいメロディを提供した。

ジャンルは、オーケストラ、吹奏楽、室内楽、合唱、邦楽、古楽、童謡、賛美歌などあらゆる方面に及び、古楽器、民俗楽器、さらには発掘された楽器、拾われたゴミまでもが楽器として活躍する。奏者でさえ、廣瀬作品が別分野の楽器でも重要な位置を占めることを知らずにいることがあるほど、その作品世界は広がりを持ち、再演の機会も多い。

京都市立芸術大学では教授、研究科長、学部長を務め、東京藝大、国立音大、同志社女子大でも教鞭を取るほか、国際日本文化研究センターでも講演を多数行っている。日本伝統音楽研究センターの設立に奔走し、初代所長を務めるなど、研究者としての顔も持つ。縄文時代の音楽については、ライフワークとして熱心に研究、実践を行った。

2005年より京都コンサートホール館長。2008年11月24日京都にて永眠。享年78歳。絶筆曲は梅原猛作詩の「空海讃歌」。墓所は横浜にあり、父母と一緒に眠る。

文責：廣瀬周平（廣瀬量平事務所） <http://www.hiroseryouhei.com>

## 主な受賞

尾高賞	1977年	「尺八協奏曲」
文化庁芸術祭大賞	1972年	レコード部門 「チェロ協奏曲“悲”トリステ」(「日本現代チェロ名曲大系」収録・東芝EMI)
文化庁芸術祭優秀賞	1969年	レコード部門 「尺八1969」(東芝EMI)
	1972年	ラジオ部門 合唱組曲「カムイの森で」(NHK)
	1973年	レコード部門 「カラヴィンカー-広瀬量平の汎アジアの世界-」(日本コロムビア)
		音楽部門 全廣瀬作品による「山本邦山尺八リサイタル」
	1976年	ラジオ部門 「天籟地響」(NHK)
	1978年	放送部門 合唱組曲「海鳥の詩」(NHK)
文化庁芸術作品賞	1989年	C D 「天籟地響」(カメラータ・トウキョウ)
	1997年	C D 「クリマ」(カメラータ・トウキョウ)
ユネスコIMCバリ作曲家会議入賞	1977年	「尺八協奏曲」
ポーロニャ・ゼッキノドロ音楽祭銀賞	1996年	「ダ・ダ・ダ」
毎日映画賞大藤賞	1991年	映画「注文の多い料理店」(音楽を担当)

紫綬褒章 1997年 旭日小綬章 2008年

函館市栄誉賞 2008年

京都府文化賞特別功労賞 2009年 京都府文化賞功労賞 1991年

京都市文化功労者 1994年

## 主要作品

### 【オーケストラ作品】

- ・弦楽のためのファンタジー (1961)
- ・ヴァイオリン協奏曲 (1979)
- ・祝祭前奏曲 (1988)
- ・チェロ協奏曲「悲 (トリスト)」 (1971)
- ・ノーシング (1981)
- ・陸前への海 (1991)
- ・祝典序曲 (1971)
- ・広島のための選持 (1983)
- ・シンフォニア京都 (1996)
- ・クリマⅠ (1976)
- ・ランドスケープ—東京のために— (1986)
- ・朝のセレナーデ (1998)
- ・尺八協奏曲 (1976)
- ・クリマⅡ (1988)
- ・序曲「王様と恐竜」 (2004)
- ・カラヴィンカ (1978)

### 【器楽作品】

- ・フルートとチェンバロのためのソナタ (1964)
- ・ピアノとチェンバロのためのコンポジション (1970)
- ・バビヨン [フルートオーケストラ] (1980)
- ・ポータラカ [アルトリコーダー、チェロ、ハープ] (1972)
- ・讃歌 (ヒム) [フルート二重奏] (1980)
- ・プンダリーカ [クラリネット、ピアノ] (1972)
- ・ハラヴィンカ [フルートオーケストラ] (1980)
- ・カラヴィンカ [オーボエ、リコーダー、弦、打の七重奏曲] (1973)
- ・讃歌 (ヒム) [フルート独奏] (1982)
- ・ビッパーラ [バスーン、ハープ] (1973)
- ・リサイクルズ [打楽器アンサンブル] (1982)
- ・バドマ [オーボエ独奏] (1973)
- ・チャンドラ [2フルート、ハープ] (1983)
- ・ハラミターとカダ [フルートオーケストラ] (1980)
- ・ハラミターとカダ [フルート独奏] (1982)
- ・バーラミター [アルトフルート独奏] (1973)
- ・リサイクルズ [打楽器アンサンブル] (1982)
- ・フィールドノート [6人の打楽器奏者] (1974)
- ・チャンドラ [2フルート、ハープ] (1983)
- ・メディテーション [リコーダー独奏] (1975)
- ・ベガス [フルート独奏と4フルート] (1983)
- ・ラメンテーション [リコーダー四重奏] (1975)
- ・祝典音楽 [吹奏楽・上巻編曲] (1984)
- ・ラクサーナ [コントラバス、打楽器] (1975)
- ・午後のバストラル [フルートとハープ] (1985)
- ・アストロノミア [創作打楽器] (1975)
- ・典礼風舞曲「雨乞い」 [フルートオーケストラ] (1988)
- ・クラリネット五重奏曲 (1975)
- ・マトリノミナベ [打楽器合奏] (1988)
- ・アスラ [ヴァイオリン独奏] (1976)
- ・行進曲ハマナス [吹奏楽] (1988)
- ・天籟地響 (てんらいちきょう) (1976)
- ・メリー・エイジ・オブ・フィガロ (1991)
- ・抒情組曲 [4楽器のための] (1976)
- ・高麗な猫のための組曲 [ヴァイオリン・ダ・ガンバ四重奏] (1991)
- ・イディール [リコーダー四重奏] (1976)
- ・メディテーション [ヴァイオリン独奏] (1992)
- ・トボグラフィー [民俗楽器による] (1977)
- ・エレギア [ハープ独奏] (1994)
- ・カマ [リコーダー、弦、打の6重奏] (1978)
- ・始祖島 [打楽器合奏] (1995)
- ・フルートレイン [フルートオーケストラ] (1979)
- ・森のコロボックル [フルートオーケストラ] (1996)
- ・イリュージョン [クリスタルガラスのための] (1979)
- ・リスとあそぶコロボックル [フルートオーケストラ] (1998)
- ・オーデⅠ [リコーダー二重奏] (1979)
- ・Illusion of the Crescent (邦題未定)  
[テナーリコーダー独奏] (2004)
- ・マリンシティ [フルートオーケストラ] (1980)
- ・シレットック (知床) 組曲 [ヴァイオリン・ダ・ガンバ四重奏] (2005)

### 【邦楽器を含む作品】

- ・トルソ [箏2、三絃、尺八、チェロ] (1963)
- ・魂ふり [長笛尺八独奏] (1982)
- ・尺八と弦楽器、打楽器のための  
コンポジション (1964-1969)
- ・十六夜 (いざよい) [尺八、箏] (1983)
- ・ハレ [尺八3] (1969)
- ・月魄 (つきしろ) [ヴァイオリン] (1986)
- ・アキ [尺八2] (1969)
- ・夢幻帖 (箏独奏) (1986)
- ・まきむく [箏2、十七絃箏、尺八] (1971)
- ・壽 (ことほぎ) [邦楽合奏] (1995)
- ・渺 (びよう) [尺八独奏] (1972)
- ・雪舟 [邦楽合奏] (1998)
- ・環 (よう) [箏独奏] (1972)
- ・浮舟 [二十五絃箏独奏] (2004)
- ・夢十夜 [14邦楽器] (1973)
- ・ヴィヴァルタ [尺八、チェロ、打楽器、児童合唱] (1973)
- ・彩 [尺八、チェロ、打楽器] (1973)
- ・鶴林 [尺八独奏] (1973)
- ・八幡野 [箏2、十七絃箏、尺八] (1974)
- ・雪綾 [箏2、十七絃箏、尺八] (1975)
- ・秋篋 (しゅうこう) [尺八2、竹打楽器] (1978)
- ・夢明 [尺八、打楽器] (1976)
- ・悼歌 [十七絃箏独奏] (1978)
- ・「みだれ」による変容 [十七絃箏独奏] (1980)

### 【合唱作品】

- ・合唱組曲「カムイの森で」 (1972)
- ・合唱組曲「中国古詩によるマドリガル」 (1988)
- ・合唱組曲「啄木による五つの函館のうた」 (2006)
- ・合唱組曲「海の詩」 (1975)
- ・合唱組曲「5つのアンセム」 (1995)
- ・[J.S.バッハ「甘き死よ来たれ」の旋律による  
前奏曲、フーガ、終曲] [オルガンと合唱] (2007)
- ・合唱組曲「海鳥の詩」 (1978)
- ・合唱組曲「ヒミコのうた」 (2001)
- ・モテット「この世の光」 (2007)
- ・合唱組曲「5つのラメント」 (1981)
- ・合唱組曲「月讀のうた」 (2005)

### 【電子音楽作品】

- ・フローラ (植物相) (1971)

## 年 譜

- 1930 北海道函館市に生まれる。その後、樺太豊原市(現ユジノサハリンスク)、札幌市に移る。
- 1948 旧制北海道大学予科に入学。
- 1953 新制北海道大学教育学部を卒業。上京して池内友次郎氏に師事し、和声法、対位法、フーガ作曲法を学ぶ。
- 1955 東京芸術大学作曲科に入学。在学中も引き続き池内友次郎氏に師事、専ら西洋音楽の厳格な作曲技法の錬磨に励む。
- 1961 同大学専攻科修了。その後、数々の放送音楽や舞台音楽を手掛け、現場での膨大な職人的修練を積む。
- 1969 全廣瀬作品によるレコード「尺八 1969」(東芝 EMI)で文化庁芸術祭優秀賞受賞。
- 1971 「チェロ協奏曲「悲(トリスト)」」(東芝 EMI 委嘱)を作曲、翌年、同曲を含むレコード「日本現代チェロ名曲大系」(東芝 EMI)が芸術祭賞を受賞。  
札幌冬季オリンピックのために、「祝典序曲」を作曲。  
東洋音楽学会インド音楽舞踊学術視察団に加わりインドを訪問。
- 1972 合唱組曲「カミイの森で」(NHK 委嘱)で文化庁芸術祭優秀賞受賞。  
「春の風」を発表 (NHK みんなの歌)、後に多くの音楽教科書に採用される。  
再びインドを旅する。
- 1973 「カラヴァンカ」[「ブンダリーカ」(いずれも日本コロムビア委嘱)などを作曲。それらを取録したレコード「カラヴァンカー-広瀬量平の汎アジアの世界」で芸術祭優秀賞受賞。  
全廣瀬作品による「山本邦山尺八リサイタル」が芸術祭優秀賞受賞。
- 1976 「天籟地響」(NHK 委嘱)で芸術祭優秀賞受賞。  
「尺八協奏曲」(NHK 委嘱)を発表し、翌年、尾高賞を受賞。
- 1977 映画「歌麿」(実相寺昭雄監督)の音楽を担当。  
京都市立芸術大学教授となる(～96年)。
- 1978 合唱組曲「海鳥の詩」(NHK 委嘱)で芸術祭優秀賞受賞。  
パリでの IRCAM の音楽祭にてビエール・ブーレーズの選曲により「チェロ協奏曲」ヨーロッパ初演(フィリップ・ミュレル独奏)。
- 1979 「ヴァイオリン協奏曲」(民主音楽協会委嘱)初演(黒沼ユリ子独奏、尾高忠明指揮、東京フィル)。その後、80年ニューヨーク・カーネギーホールでアメリカ初演(黒沼ユリ子独奏、セルジュ・コムシヨナー指揮、アメリカンシンフォニー)、81年ヘルシンキにてヨーロッパ初演(ヨシコ・アライ・キマネン独奏、渡邊雄雄指揮、ヘルシンキフィル)、メキシコシティにてラテンアメリカ初演(黒沼ユリ子独奏)。
- 1981 札幌交響楽団創立20周年委嘱作品「ノージング」初演。
- 1983 オーケストラ曲「広島のための連祷(リタニア)」を初演(岩城宏之指揮、日本フィル)。
- 1984 日本現代音楽協会委員長となる(～88年)。
- 1986 オーケストラのための「ランドスケープ」(東京都委嘱)を初演(ズデネク・コシュラー指揮、東京都響)。
- 1987 京都団体炬火讃歌を作曲。  
「京都・若い作曲家による連続作品展」を開催、以後20年34回にわたって主宰し、のべ193の作品を世に出す。
- 1989 ニューージーランド・オークランドにて「尺八協奏曲」南半球初演(ケニス・ヤング指揮、ウェリントン響)。熊本市制100年記念の交響詩「楠若葉(くすわかば)」作曲。CD「天籟地響」(カメラータ・トウキョウ)が文化庁芸術作品賞受賞。
- 1990 藤堂音楽賞受賞。
- 1991 プラハの春音楽祭に招かれ、メタナホールにて「祝典序曲」演奏(小林研一郎指揮、日本フィル)、ウィーン楽友協会ホールアムステルダム・コンセルトヘボウ、リンツ・ブルックナーホールなどでも上演。  
映画「注文の多い料理店」(岡本忠成監督)の音楽を担当。  
毎日映画賞大藤賞受賞。  
京都府文化賞功労賞受賞。  
「芸術祭典・京」音楽・舞踊部門プロデュース(～00年)。
- 1993 三内丸山遺跡の映画「木と土の王国」の音楽を担当。  
京都市立芸術大学音楽学部長となる(～96年)。
- 1994 京都市文化功労者の表彰を受ける。
- 1996 京都市立芸術大学を退官、京都市立芸術大学名誉教授となる。  
廣瀬量平作品コンサート(大阪いずみホール、サントリー音楽財団主催)。  
芸術祭典・京にて「廣瀬量平 オーケストラの夕べ」(小松一彦指揮、京都市交響楽団)。  
「ダ・ダ・ダ」がパロニーヤ・ゼッキンドロー音楽祭銀賞受賞。  
京都新聞文化賞受賞。
- 1997 紫宸褒章受章。  
CD「クリマ」(カメラータ・トウキョウ)が文化庁芸術作品賞受賞。  
「どんなにちいさいこりでも」が「讀美歌21」に収録される。
- 1998 弦楽合奏のための「朝のセレナーデ」(萬有製薬委嘱)を初演。
- 2000 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター初代所長に就任(～04年)。  
東京都交響楽団定期演奏会にて「廣瀬量平作品集」(矢崎彦太郎指揮)。
- 2001 無伴奏女声合唱組曲「ヒミコのうた」を初演(東京女声合唱団委嘱)。
- 2004 梅原猛氏のスーパー狂言に触発され、序曲「玉縁と恐竜」初演(小泉和裕指揮、大阪センチュリー響)。
- 2005 京都コンサートホール館長に就任。映画「死者の書」(川本喜八郎監督)の音楽を担当。  
無伴奏女声合唱組曲「月讀のうた」を初演(東京女声合唱団委嘱)。
- 2006 合唱組曲「啄木による五つの函館のうた」初演。  
フルートと合唱のための「風よ回れ」初演。
- 2007 オルガンと合唱のための「J.S.バッハ「甘き死よ来たれ」の旋律による前奏曲、フーガ、終曲」、モテツ「この世の光」を初演。
- 2008 「ヴァイオリン協奏曲」再演(山田晃子独奏、東京フィル)。  
女声合唱組曲「三つのメルヘン」を作曲。  
旭日小綬章受賞。函館市栄誉賞受賞。  
京都にて永眠(11月24日、享年78歳)。絶筆「空海讃歌」(洛南高校委嘱)。
- 2009 京都府文化賞特別功労賞受賞。

## 次 第

「お別れの言葉」

哲学者 梅原 猛

・

アルトフルートとフルートオーケストラのための  
「波羅蜜多と伽陀(パラミターとカダ)」(1980)

フルート:清水信貴(京都市交響楽団)  
青木明指揮、フルートオーケストラ 湖笛の会

・

「京都芸大と廣瀬量平」

京都市立芸術大学学長 潮江宏三

・

「みだれによる変容」(1980)

十七絃箏:島崎春美(日本音楽集団)

・

「作曲家としての廣瀬先生」

中村典子

・

ヴァイオリン独奏のための「アスラ」(1976)

梅原ひまり

・

「関西にとっての、また、プロデューサーとしての廣瀬」

横山邦彦

・

「五つのラメント」より「天のベンチ」(1981)

「挽歌」(朗読・2005)

「この世の光」(朗読・2007)

「漢詩による五つの歌」より「この盃を」(1988)

合唱 立命館大学メンネルコール

緒方秀政指揮

詩朗読 東京女声合唱団 榎裕子 ほか

・

「教育者としての廣瀬先生」

上田 益

・

「朝のセレナーデ」第一章(1998)

増井信貴指揮

京都市交響楽団・京都市立芸術大学有志

(上村昇、岸邊百百雄、久合田緑 ほか)

・

「ブルートレイン」(1979)

## 追悼講演 1

## お別れの言葉

うめはら たけし  
梅原 猛  
(哲学者)

本日の「廣瀬量平先生をしのぶ会」に、たくさんの方にご来場いただきまして、本当に嬉しく思います。これは廣瀬さんがいかに多くの人に慕われていたかを物語るものです。発起人としてはこの上もない喜びですが、しかし廣瀬さんとこれほど早くお別れすることになるとは、まったく思っていませんでした。

4年ほど前（2004年10月）のことですが、私が原作を書いて茂山千作一家によって演出上演されましたスーパー狂言「王様と恐竜」を、廣瀬さんが新たにオーケストラ曲として作られました。この京都コンサートホールで、大阪センチュリー交響楽団によって演奏されたのを、私は聴きました。

この狂言は、トットラーという、ヒトラーと東条とブッシュを兼ね合わせたような戦争好きな王様が、水爆のボタンを押しそうとしますが、恐竜のたぶらかしによって、間違っで糞尿のボタンを押ししてしまい、世界中が糞尿の海になって戦争が避けられた、という話です。

廣瀬さんはこの狂言にたいへん興味を持って、これを音楽（オーケストラ曲）にしました。それは日本の音楽としては珍しく、ピリッとした風刺が効いて、そこに笑いと悲しみが感じられ、たいへん

すばらしい曲であったと思います。

私は今さらながら、廣瀬さんの才能に感心して、これをオペラにできないか、と廣瀬さんにたずねました。すると、「オペラにはなりません。オペラはやっぱり恋の物語でないと駄目です。トットラーや恐竜では恋になりません。恋の物語を作ってください」と廣瀬さんに言われました。しかし、私はこの歳になって恋の物語を書くのは難しいと思って、辞退しておいたのです。

実は20年ほど前から、廣瀬さんと一緒にオペラを作るという計画がありました。なかなかうまくできず、延引したままでしたが、私は、『古事記』にあるかるのみこ軽皇子の兄妹心中の話をもとに台本を書いて廣瀬さんに作曲してもらったら、すばらしいオペラができるのではないかと、ひそかに思っていました。しかし、結局、空しく実現しませんでした。

廣瀬さんと私が知り合いになったのは、もう40年も前のことです。

ある日、廣瀬量平という見知らぬ作曲家から、私の『地獄の思想』（1967年、中公新書）を読んでたいへん感激して、その感激をもとに曲を作ったと言って、作品の録音テープが送られてきました。それは日本の楽器も使ったとても良い音



楽だったんですが、どういうところが『地獄の思想』の影響を受けたのか、それはわかりませんでした(笑)。

まもなくして、廣瀬さんと親しく話をするようになると、談論風発が実に面白くて、私は廣瀬さんに深い友情を感じるようになりました。

それから2、3年後だったと思いますが、音楽学部で定年を迎えられた教員の後任人事がありました。有名な作曲家からの売り込みもありましたが、音楽学部からの強い推薦で廣瀬さんの名前が挙がったので、私は廣瀬さんとの個人的な関係を口に出さずに、大賛成しました。1977年のことです。

廣瀬さんに来てもらって、音楽学部は多くのことを教えられました。廣瀬さんは音楽家として稀にみる広い知識と教養を持たれ、そして、創造に対する情熱を持たれていました。作曲科の学生だけでなく音楽学部全体に大きな影響を与えたと思います。

数年前のことですが、私は、円空(1632-1695)の仏像の取材で、円空仏のある北海道の寺を遍く訪ねました。函館のある寺を訪ねたところ、それが思いがけなく、廣瀬家の檀那寺でありました。その和尚さんが廣瀬さんをととても気に入っていて、廣瀬さんの若いころの話をしてくれました。ちょっと変わっている人だけれど、すばらしい音楽家だ、と言って。

函館は明治維新の時に、いち早く西洋文化をとり入れたところなんです。ですがど

こか最果ての地の、江戸時代の庶民の哀しみが染みついている。そういう開明性と土着性が交り合った街だと思います。

この街が廣瀬さんを生んだことに、改めて私は、廣瀬さんの音楽家としての素質を感じました。

廣瀬さんは、東西の文化を融合させて、西洋音楽に日本の楽器を加えて、新しい意味での世界的な音楽を作ろうとする意思を強く持っておられました。

その点では、武満徹さん(1930-1996)と同様な志を持っておられましたが、廣瀬さんが武満さんの話をするときは、その言葉の背後に、武満さんに負けまいとする意思が感じられました。廣瀬さんには世渡りのぎこちないところがあって社交も苦手だったと思いますが、しかしその音楽は、武満さんに匹敵するすばらしい音楽だったと思います。

いつの日か、東西の音楽を融合させて新しい音楽を作った偉大な作曲家として、廣瀬さんが改めて評価される時がくるのではないかと、私は思っています。

私が勤めていた国際日本文化研究センター(京都市西京区)では、廣瀬さんに講演をしてもらったことが、3回ほどあります(1995年4月「唱歌にうたう日本の四季」、1997年4月「唱歌にうたう日本の風景」、2001年10月「縄文人にとっての音」)。

廣瀬さんは、講演の最中、パッと何かを思いつくと夢中になって話をする。その話はよくわからない話が多い(笑)。し

かし、何か凄い着想が含まれている。そして黒板に字を書くんですが、その字もよくわからない(笑)。しかし、どこか深い洞察のある言葉でした。芳賀徹さんをはじめ、それを聞いていた研究センターの教授たちは、「あの様子はまるで梅原さんにそっくり」「廣瀬量平は音楽界における梅原猛だ」と言って大笑いしていました。

夢中になると我を忘れる、服装にもかまわない、自分ではよくわかっているんですが、他人にはわからないことをしゃべる(笑)。そういう点は確かに、私とたいへんよく似ている。私の方が廣瀬さんよりずるいところがありますが、廣瀬さんはもっと率直な人です。

廣瀬さんは亡くなられる前(2008年5月)に、函館市栄誉賞をお受けになりました。これは廣瀬さんにとって、たいへん嬉しいことだったと思います。彼は函館をずっと愛していた。そして、昨年秋、京都府文化賞特別功労賞受賞の知らせが廣瀬さんの生前にあり、廣瀬さんは喜ばれたそうです。冥途の土産になりますが、喜ばしいことです。

結局、私と二人でオペラを作ることは

できませんでした。私との共同作品は、二つあります。

一つは、私が総長をしております、ものつくり大学(埼玉県行田市)の校歌です。作詞は私ですので自分のことを褒めるのはおこがましいのですが、日本の大学の校歌の中で一番良い校歌だと思っています。

もう一つは、私立洛南高等学校(京都市南区)から頼まれた、「空海賛歌」という曲です。空海を精神を大笑いで表現する、そこに、私はワハハハハと笑いの言葉を入れました。廣瀬さんは苦勞しておおかた作曲されましたが、未完の部分が少し残りました。それがお弟子さんによって補われ、近々発表される予定です。

私はまだ当分この世で頑張るつもりですが、やがてあの世へ行ったら、廣瀬さんと、地獄の鬼を主題にしたオペラを作りたいと思っています。

廣瀬さん、長い間の交友は、本当に楽しかった。

心を込めて感謝し、廣瀬さんの冥福を祈りたいと思います。

「廣瀬量平先生をしのぶ会」

2009年1月9日 京都コンサートホール

追悼講演2

京都芸大と廣瀬量平

しおえ こうぞう  
潮江 宏三  
(京都市立芸術大学長)

京都芸大での廣瀬先生のご業績についてお話いたすのが、ここで課せられましたわたしの役割ですが、生憎、わたしは美術学部出身ですので、本当のところ、先生の音楽学部内での教育者としての顔、音楽学部の運営で発揮されていたリーダーシップ等について、微に入り細に入り存じ上げているとは申せません。そのことにつきましては、おいおいもっと身近におられました方々からお話を伺えるとしますので、それにお譲りしたいと思います。

ここでは、皆様のお手元の年譜(P.6)にも記載されている、具体的なことから始めさせていただきたいと思います。

先生と京都芸大とのご縁は、1977年、まだ美術学部が東山七条にあり、音楽学部が京都会館の近くにあった頃、先生が、作曲専修の教授として赴任なされたことに始まります。

その3年後の1980年、ちょうど創立100周年に当たる年には、現在の沓掛キャンパスへの両学部統合移転がなされ、その記念演奏会には先生の「祝典序曲」が演奏されたことを記憶しています。

1991年から定年でお辞めになる96年までは、音楽研究科長、音楽学部長のご要職を歴任なされ、それまではもちろんのこと、さらに音楽学部の発展に力を尽

くされました。

そのなかで、京都における日本伝統音楽に対する要望をひしひしと感じられ、「外来文化を摂取して、世界の水準に迫る、ということの反面、日本の伝統文化を究めることにより一層磨きをかけ、未来を託すすぐれた芸術を世界に発信することは重要なことで」あるとの思いから、日本伝統音楽研究センターの設置を構想され、99年には設置準備室長としてその設置に全力を傾注されました。

紆余曲折はありながらも、創立120周年の2000年にはセンターが設置され、それを機に、初代所長を勤められました。2004年に退任されるまでその職にあって、センターの基盤形成の役割を見事に果たされ、日本伝統音楽研究センターの、現在、日本にある希少な、文字通り京都らしい研究機関としての、今日ある存在意義を築き上げられました。

これで話が終わりますと、確実にわたしが書いたものなのですが、まるで秘書が作文をしてそれを読んだだけであるかのように聞こえるかもしれません。それに、作曲家としての赫々たるご業績に比して、これではあまりにも形式的、あまりにもあっさりとしすぎています。幸い、学部こそ違っていました、わたしは廣瀬先

生とはなぜかご縁がありました。身近なお弟子さんに比べれば、それは頼りないか細い糸のようなものですが、それを紡ぎ出しながら、いくぶん遠目の視点からですが、時系列に沿って、先生のお姿をわたしなりに思い起こして描き出し、大学キャンパスでの廣瀬先生の思い出を皆様と共有できましたら、と思います。

いつのことは定かではありませんが、音楽学部にすごい作曲家が来た、それも芸大、音大プロパーではなく、北大という一般の大学に学んで作曲に転じた人だ、という噂は、比較的早くから聞いていました。たぶん、まだ大学が沓掛に移転する前だったと思います。その時、妙なもので、芸術への憧れを抱きながらも一般大学で学んだわたしは、先生の曲を聴いたこともないのに、すでに大きな評価を得ていたこの芸術家に対して、失礼にも、勝手に共感を覚えていました。

80年に沓掛に移転し、統合キャンパスとなって、今度は、先生を実際にお見かけするようになりました。当時、学長をなさっていた梅原先生と同じ芸術学研究室に所属していたわたしにとっては、これは、実に、衝撃的な光景でした。

そのずんぐりした背格好、せっかちにずんずんと歩かれる歩き方、そして、これはちょっと言い難いことですが、とてもスマートとは言えない着こなし、まるでプチ梅原ではないか、と思いました。事実、同じ意見の同僚も多く、これは、わたしだけの感想ではありませんでした。

もちろん、「プチ」というのは、けっしてマイナーという意味ではなく、梅原先

生よりも若かったこと、そして梅原先生よりも愛くるしく見えたので、秘かにそう呼ばせていただいたということですが。簡単に言えば、梅原先生が二人になったという、ある種の感嘆でした。廣瀬先生と言葉を交わすようになると、興が乗ると止まるところを知らないその話しぶりまで似ていて、その感想をいっそう深くしました。

それにしても、二人には、共通して一種妖気ともいえるようなものが漂っていました。長い日本文化の歴史のなかで、常識という誤解によってできた堆積を、ブルドーザーのように掘り返し、そこに立ち現れたものを楽しみ、味わい尽くしつつ、新たな形に織り直していく梅原先生と、普通であれば、人が尻込みするような原生林、たぶん縄文時代の森にどんどん分け入って、水の音や風の音はもちろんのこと、獣たちが出す音だけではなく、植物の呼吸やときめきまでも、楽音として聞き分けた、廣瀬先生の足跡は、ある意味、妖気に憑かれた者の仕業、と言えるでしょう。

唯一、違っていたことは、廣瀬先生の場合は、先の「愛くるしいお顔」の上には、いつ見ても、寝起きのようなくしゃくしゃの髪の毛がのっかっていたことでしょうか。その意味では、寝起きのプチ梅原と訂正した方が、もっと正確だったかもしれません。

当時のお二人は、容貌、雰囲気似ていただけではなく、皆様もご存知のように、かたや古代史研究、かたや作曲と方法こそ異なれ、西洋の方法論を基盤とし

ながら、土着の思想性・感受性の深淵を極めようとする姿勢において、共通のものがありました。お二人の間に惹かれ合うところが大きかったゆえに、梅原先生のお招きで広瀬先生も京都に赴かれる心を固められたのだらうと、容易に推測することができました。そしてそれは、本当に、京都にとっても、京都芸大にとっても大きな幸いでした。

その余禄でしょうか、梅原先生と同じ研究室の末席を汚していたわたしも、やがて広瀬先生に認知していただけるようになり、お会いするたびに挨拶をさせていただき、いつの間にか、言葉まで交わすようになりました。

先生の作曲面でのお仕事は、わたしにはとても語るできませんが、そのお話の中で、学問的関心の幅広さ、教養の深さ、なによりもいい意味での大学人としての見識をひしひしと感じていました。それは、短くとも、結構緊張感のある刺激的な触れ合いでした。

先生のご経歴を改めて拝見し、先生が作曲に打ち込むまでの、思想的遍歴の長さや広がり、そうしたものを培ったんだと、また、そこにこそ、創作の面で次々と新しい世界を切り開いていった、エネルギーの源があったんだと、今、納得しているところです。

そうしたお付き合いのなかで、全く畑違いのわたしが、先生からのお声かけで、芸大の大学会館ホールで「ルネッサンスの美術と音楽を『見る！聞く！踊る！』」という企画に関わったことがありました。先生が定年退任なさる直前の、1996年1

月のことです。

残響が長すぎると、悪評紛々のこのホールにも、活用する方法があることをやってみせようよ、というのが先生のお誘いの言葉でした。人が、常識を盾に踏み止まっている枠を、いつも鮮やかに取り外してきた先生の姿勢が、その悪戯っぽい言い方に込められていました。

西洋古楽器の演奏とそれによる踊り、それに美術史学者の話を噛み合わせるというコラボレーションでした。これは、多数の出演者からなる企画で、大いなる人脈をお持ちの先生にとってもそれほど容易な企画ではなかったように推測します。

スライドを使って、わたしがルネッサンス絵画に現れた音楽、の話をした後、行われたルネッサンス音楽の演奏と踊りは、大成功で、素晴らしいものでした。大学会館ホールの残響の長さが、広瀬先生の狙い通り、逆に見事に生かされました。

いつも恋人たちのそばで囁いていたリユートが、そこでは朗々と歌い、リコーダーも輝かしい音を解き放っていました。少しメランコリックなメロディーや快活なリズムに合わせた古舞踊を見ていると、ルネッサンス時代の人々の姿が、そのまま彷彿とするかのように感じた瞬間もありました。まさに至福のひと時でした。

今では、こういう形で先生の企画に参加させてもらったことが、わたしにとってかけがえのない思い出になりました。わたしが、現在、エリザベス朝時代の細密肖像画家ヒリヤードの研究に打ち込ん

ているのも、そうしたご縁あってのことかな、と考えています。

その後の先生とのご縁は、先生が日本伝統音楽研究センター所長として、わたしは評議員として大学の評議会で同席するようになってからさらに深まり、そして少し複雑になりました。

この日本伝統音楽研究センターに関しましては、当然、廣瀬先生の構想が基盤になっているわけですが、それにつきましては、先生には、きっと、当初通りの十全な形で実現していたらと、さぞ歯噛みする想いでおられたかをつくづく思います。現実的な対処をしなければならぬとはいいいえ、このように収縮している時代ではなく、あと10年以上も早ければ、本当の意味で伝統の都、京都を、今まさに盛り上げるもっと壮大なスケールのものになっただろうと思うのは、わたしだけではないでしょう。それでも、先生は、小振りでも鮮明な性格を持った研究機関として設計され、基盤形成に尽力されました。それが、先ほど申し上げましたように、今や、見事に花開き、その分野では他にない、貴重な存在になっています。

この評議員としての4年間は、先生の、大所高所から語られる大学人としてのご意見に傾かされることがしばしばでした。わたしが生意気な意見を披露して迫る、という剣呑な瞬間もありましたが、その折でも、しっかりと冷静に耳を傾けて、受け止めていただきました。

今思い返すと、先生のお心の寛さに比しての自分自身に、耳が赤くなるのを覚えます。それは、先生が明快なご見解の下、

リーダーシップを発揮されていたことは、火を見るよりも明らかだと、今になって思うからです。

このように、大学の常で議論の場ではいつも平和というわけにはまいらなかったわけですが、その後、大学をお辞めになってコンサートホールの館長になられてからも、先生には、いつもにこやかに、あるいは懐かしさを込めて、接していただきました。熱い思いを共有したことで、逆に通じ合うものがあるのかな、なんて勝手に思っていました。

特に、非才の輩（やから）、わたしが学長に選ばれたことを、手を取って先生に喜んでいただきましたことには、身に余るものを感じました。

けれど、この数年は、眼差しからは、変らぬ力をいただいていたものの、お会いするたびに、先生のお体が明らかに小さくなって見えました。それは、とても悲しいことでした。そして、予感以上に早く、このような悲しみの時を迎えることになりました。

ここまで、多少個人的に過ぎたかもしれませんが、わたしの心に染み込んだ在りし日の先生のお姿を皆様にお示してきました。改めて、失ってしまったものの大きさを実感し、ただただ愛惜の想いのなかに漂っているかのようです。

気を取り直しまして、まずは、京都芸大の学長として、大学の教育研究のために尽くされた先生の多大なるご功績に、深甚なる感謝の念を捧げたいと思います。日本伝統音楽研究センターが、先生あ

てのものだったことはもちろんのこと、何よりも、京都に来られて、先生が心血を注いでこられた、音楽学部の作曲専修、現在の作曲専攻で学んでいる、あるいは学んだ学生が、今、本当に豊かな実りの時を迎えていることを、今は、高いところにいらっしゃる先生に、誇らしくご報告申し上げたいと思います。

自らのご経験から、聴衆の前でのパフォーマンスへと繋げる機会を設けて、若者たちを刺戟、督励していただいたことが、絶えることのない系譜となって、今、大きく花開いています。この感謝の言葉は、暗黙の了解ということではなく、言葉として、もう少し早く先生にお伝えするべきでした。本当にありがとうございました。

最後になりますが、定年の折に廣瀬先生が書かれたお言葉、「(1) 世界のこれまでのすぐれた遺産を表層的ではなく、しっかりと把握すること、(2) 我々の内なる伝統が今日のものとして顕在化され、

価値ある発信をすること、(3) そして京都市立芸術大学が、そのより明らかな実現と発展のための一つの中心として機能すること」、そこにこそ「世界に京都という都市が存在することの価値」があり、それが「京都芸大の存在理由と使命とも関わっている」というメッセージを読み返す時、これほどに熱く、先生が、「京都芸大人」として、京都芸大のことを愛され、その先行きにまで心配りされていたことを知り、改めて深い感銘を受けます。わたしは、これほど簡潔かつ明確に、京都芸大の存在意義を語った言葉を知りません。

先生の心に深く刻み込まれていた、この想いと願いを、京都芸大の学長として、全身全霊で受け止め、これからも、真の意味での実現に向けて、これを担い、継承していくことを、天上の先生にお誓いし、結びとしたいと思います。

「廣瀬量平先生をしのぶ会」

2009年1月9日 京都コンサートホール

## 追悼講演 3

## 作曲家としての廣瀬先生

なかむら のりこ  
中村 典子

(京都市立芸術大学音楽学部講師)

廣瀬量平先生が11月24日に逝去されて、はやひと半月が経ちました。

千年の都に遺された膨大な数の作品、その茫洋と計り知れぬ大きさにたじろぎつつ、先生へ、感謝のこぼれを述べさせていただきます。

西洋、そして東洋。太古、そして未来。それらの両極は、師、廣瀬先生のなかで出会い、葛藤しつつもひとつの響きとして包含され、私達のところへ広く解き放たれてきました。

「何事も道のないところに道をつくるのは好きです」と語った先生は、本当にありとあらゆるジャンルに膨大な作品を書かれました。オーケストラ作品、室内楽作品のみならず、合唱作品、現代邦楽作品、リコーダーやピオラ・ダ・ガンバなど古楽器作品、打楽器作品、まさにひとつのジャンルを開拓したというにふさわしいフルートオーケストラ作品の数々。またリコーダーを始めとする古楽のジャンルにおいては、古楽の故郷ヨーロッパでも新たな世界を拓き、その作品はリコーダーの神様のように愛されています。

それぞれのジャンルにかけがえのない

作品群を遺すがゆえに、ともすると、その他のジャンルにても偉大なパイオニアであることは、かえって意外に知られることが少ないのではないかと思います。にもかかわらず、それをもゆるす底知れぬ大きさこそが廣瀬音楽のもつ包容力そのものであり、また新しい芽を次々と生み出すような豊かな音楽観、歴史観に発していることを証明しているのではないでしょう。

私は今、廣瀬量平先生が撒かれた種をしっかりと受け取った先輩後輩作曲家達の芽吹き多彩さに思いを馳せ、教えを受けたものを代表し、こころよりの敬意と感謝をあらためてささげます。

師、廣瀬量平先生は、音楽がどこからやってくるかを知っている、音楽の真の預言者であったと感じています。その多元的な活動の全貌は、まさに、これから明らかになっていくでしょう。

本当にありがとうございました。

「廣瀬量平先生をしのぶ会」

2009年1月9日 京都コンサートホール



## 廣瀬量平先生の思い出

くぼた きとこ  
久保田 敏子

(日本伝統音楽研究センター所長)

### タスキを受けて

昨秋、ユニークな研究機関である京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの創設者で初代所長の廣瀬量平先生という大きな柱を失って、まだ茫然としています。しかし、これまでは一伴走者に過ぎなかったが私が、三代目所長という重いタスキを受継いだ以上、オロオロばかりしてはいられません。

昨春、所長職を拝命した折、コンサートホール館長でいらした廣瀬先生にご報告に伺った折、「三代目は必ず家を潰すことになっていますが、そうならないように頑張ります」と申し上げましたら、「無いけどサア、締めてやって下さいよ。ハッハッハッ」と笑い飛ばされました。それが「能力」を引っ掛けた「禪」と気が付いたのは暫くしてからでした。

先生と一対一の会話にはよくこうしたジョークやナゾが飛び出しました。ある退屈な会合でのこと、隣の席の先生は何やら真剣に紙に書いておられました。暫くすると、スッと紙が回ってきました。何とそこには回文が書かれていたのです。よく<内職>をしたり<落書>を回したりしていた学生時代の悪戯を思い出して、思わず頬が緩みました。

### 廣瀬量平先生との不思議なご縁

廣瀬先生とは、とても不思議なご縁がありました。私は学生時代から、姻戚にあたる池内友次郎先生に和声学と対位法、初歩の作曲の個人レッスンを受けていましたので、折に触れ、門下の廣瀬先生や松村禎三先生などの偉い先生方をお見かけしてはいたのですが、当時はただ遙拝するのみでした。

しかし、1991年から始まった<芸術祭典・京>のお手伝いをさせて頂くにつれ、廣瀬先生と親しくお話させて頂けるようになったのです。

遙拝時代には、とても気難しそうで近寄り難い雰囲気でしたが、思いの外気さくな方で、いつも話が弾みました。意外に知られていませんが、池内友次郎先生は高浜虚子の次男で、俳句の作品もたくさんあります。廣瀬先生とは、池内先生のこと、俳句のことをはじめ、作曲家や演奏家のこと、はては宗教論、恋愛論から釣や料理の話に至るまで、話題には事欠きませんでした。

まだ私が携帯電話を持っていなかった頃、家の電話番号を聞かれてお教えしますと、手を打って「同じだよ。<水良いナ>だよネ」と嬉しそうに仰いました。最後の4桁が3217でした。以来、よく電話が

かかってきました。夜中であろうと、出ると1時間は覚悟が必要でした。干支が一回り違いの同じ<午>だとわかった時も、「だからウマが合うのかな」と、とても嬉しそうに仰いました。私はウマが合うなど、思ったこともなかったのですが。

また、同志社女子大学の非常勤講師として、出講日が同じだと判って以来、私の授業が終るまで待っていて下さることもよくありました。ある日、「今日は面白いものを見つけたよ」と、古書店で買われたらしい『小學唱歌集』を見せて下さいました。まるで子供が捕まえたバッタか何かを得意気に見せるのと同じ表情をされたのが、微笑ましかったのを覚えています。当時、私は教育大学に奉職していましたので、その手の本は手近にありました。その日もたまたま鞆の中に入っていたのですが、童心？を傷つけない母心？がよぎりましたので、「先生、手品をお見せしましょうか」と言って同じ本を取り出しますと、吃驚なさって「不思議だよ。センサーとは見えない糸で繋ってるようだね。赤だったりして」などいつも以上に汗を流しながら仰り、思いもしないお言葉に戸惑った事もありました。

廣瀬先生は、同僚の女性教員には「\* \*さん」と、人前であろうと親しげに下の名前でお呼びになりますのに、私には何故かいつも「センサー」でした。それが気重でしたので、「<先生>はお止め下さい」と申し上げたのですが「これが私のケジメだから」と、汗びっしょりになって訳の分からない理由を仰り、恐れ多

くもずーっとそのままでした。ともかく、廣瀬先生とは、こんな不思議なご縁を頂いていました。

### 研究センターの立ち上げ

折に触れての雑談で、「音楽大学に邦楽専攻を置く」ことの是非について話題にはなっていたのですが、ある時、いつもとは違う調子で「折り入って相談したい」との連絡を受けました。

「美術学部には日本画の専攻があるのに音楽学部には西洋音楽の専攻しか無いのは、伝統文化のメッカである京都市にとって如何なものか」という市民の要望から、「芸術大学の中に日本音楽専攻、いわゆる邦楽科を設置して教育と研究の両面から貢献できるように、色々調査検討をしたい」とのことでした。

早速、東京芸大の友人から情報を得た上で、「専攻ジャンルが多岐にわたる上に、流派の選定も難しく、その指導者の選定となるとさらに困難で、教室の問題、経費の問題、京都という場所柄などの点からも、難しいのではないかと、ご報告しました。

結局は、研究に軸足を置いた「日本伝統音楽研究センター」（当時は未だ名前すら無い状態）を大学の120周年記念事業として、立ち上げることになったようです。

以来、呼び出しを受けるたびに、廣瀬先生の篤いお考えを拜聴する事になったのですが、いつの間にか、それは具体的な相談になり、そのうち設立準備委員と

して正式に、京都市の職員の方とも面談させて頂くようになりました。ただ、常に慎重な廣瀬先生からは、この件について、堅く口止めされていました。先生ご自身も、直接の関係部署の方以外には、ごく僅かの先生にだけ相談されていたようでした。

私は、もとより、その構成員になるなど、微塵も思っておりませんでしたので、色々データをお目に掛けて、結構無遠慮に意見を申し上げました。発言したことが次々と盛り込まれていくに従って、嬉しいような恐ろしいような複雑な気持ちになったものです。

スタッフについても、出発は公募ではなく、一人ずつ当たりたいということで、学会名簿の中から、適当な方々のお名前をチェックしました。何と、廣瀬先生はご自分の目でそうした人々を観察したいと、学会発表や、会合などがあるたびに気軽に出かけられ、これは、と思われた人には「偶然を装って面談したいから、お膳立てしろ」とまで仰せになるほどの熱の入れようでした。それにしても、廣瀬先生の口の堅さと、慎重な物事の運び方には、ただただ感服の他はありませんでした。

紆余曲折はありましたが、建物の建築も進み、交渉できそうな候補者の目安も付いた頃には、開設予定の2000年も間近に迫っていました。これで私の役目も無事に終わられると、ホッとて、そのころ同時に関わっていました奈良県明日香村に開設予定の「万葉文化館」<当時の仮称は「万葉ミュージアム」。2001年9

月オープン>の方に力を入れられると喜んでいました。

そんなある日、当時私が勤務していた奈良教育大学の学長から呼び出しを受け、「京都芸大の西島学長が来られ、<未だ本人には伝えていないが、京都芸大に欲しい>と云われたが・・・」と、寝耳に水の話をして、吃驚仰天！ 人事には全く別の人の名が上がっていましたし、ただ戸惑うばかりでした。その日の夜中、廣瀬先生から長電話を受け、結局、遅疑逡巡の末、お受けすることとなりました。その後は急ピッチで、諸事が整えられ、めでたく発足に至ったという次第です。

## NHKとNTT

二名の発令は遅れて5月になったのですが、廣瀬先生を所長に長広比登志、久保田の教授陣、ステイーヴン・ネルソン、高橋美都、田井竜一の助教授（現在の呼称は准教授）陣で何とか「日本伝統音楽研究センター」の船出をしました。

廣瀬先生は「いいねえ、NHKとNTTだよ」と、思いもしなかったことを仰いました。皆のイニシャルからの発想ですが、さすがは言葉遊びの得意な先生だと感心しました。先生はいつもユニークでいらっしゃり、どんなに忙しくてもゆとりと遊び心を持っておられましたので、「芸術家ってこうあるべきなのか」と、常々感心していました。

先生は、物事を決断されるときには、いつも『六法全書』を片手に、先の先まで見通した図面を描かれ、緻密に構築さ

れていましたが、ご自身の事には全く無関心でした。ネクタイがヒョコ歪んでいるのは序の口で、夏場はお臍が覗いていたり、正面の窓は開けっ放しで、時にはYシャツの端が顔を出していても、平気でした。申し上げるのも憚られますので、一計を案じて、所長室への出入りには必ず目に入る場所へ、等身大の姿見を置きましたが、鏡の存在さえ意に介されず、全く効果無しでした。

先生は近場へ移動の時でも、いつも大きな鞆を抱えておられ、何かが必要になると、人前を憚らず、中を引っ掻き回して取り出されました。ことある毎に掻き回されるので、中身はごみ箱以上に悲惨でした。机の周囲もしかり。しかし、そこからは想像も出来ないような緻密な音構成の作品をたくさん創作しておられるのですから、驚くばかりです。まさに「カオス＝天地創造以前の世界の状態」を実感させられました。

### 糠床と船底の名言

廣瀬先生は音と言葉の魔法使いのように、実に見事にそれらを操って、ぴったりの場所に登場させておられます。先日、ある箏曲演奏会での挨拶の中で、廣瀬先生が最終の公開講座で仰った比喻が引用されていて、とても嬉しくなりました。「そもそも、伝統というものは、漬物の糠床のようなものではないか」という喩えです。それは、近世から近代にかけて来日した外国人の手記などに「日本の音楽は聴くに耐えないものである」と記

されているのを受けての比喻で、「糠そのものは不味くて食べられないけれども、糠に漬けた食材には糠の酵素が作用して変質し、独特の要素と旨味が生ずる。そしてまた、そのためには、糠自体にも絶えざる手入れが必要なのだ」ということで、実に言い得て妙だと思います。そして、こうも仰いました。「どんな伝統にも、良い面と、負の側面がある。また、良いものでも惰性的に伝承されると、いつの間にか生命力が失われることもあり得る。どんな船でも、いつかは船底に貝殻や海藻が付着したり、錆が付いたりするものだ。伝統をいつまでも新鮮に保つことにも、絶えざる努力と緊張と問題意識が必要だ」と。私もこれらを胆に命じて反芻しています。

### 廣瀬先生のご遺志を承けて

私どもの研究機関に「センター」の名を付けることを主張されたのも廣瀬先生でした。日本の伝統音楽を研究するには「広い視野に立って総合的に研究し、発信していかなければならない」との信念をお持ちでした。ご自身の退任講演でも力説されましたが、「音楽の研究は、文献研究とは違って＜ライブな生き物＞である」こと、また、Arnold J. Toynbeeの言葉を引いて「歴史を研究するときには＜事実を緻密に探究する＞だけでなく＜その背後にある意味を探究する＞ことが大切である」こと、さらには日本古代史の上田正昭先生の言葉を引いて「史実の実証的研究だけでなく、問題性を発見することが大事

だ」とも仰いました。客観的事実をきちんと踏まえた上で、そこから推論する力が大切であるから、「多様で多角的な今日や未来に向かって、〈生きた〉研究ができるような組織であり、その中核でありたい」との思いから〈センター〉と名付けられました。このセンターという言葉には、単に京都芸大のためだけではなく、京都のため、日本のため、さらには世界のために存在する研究の〈センター〉であるべきだ、というのが廣瀬先生の篤い希いが籠っているのです。

リレーのタスキを受けた今、こうした理念の達成に向けて、社会に開かれた研

究機関たり得るように、所員一丸となって努力することを、先生の御霊前にお誓いいたします。



廣瀬量平先生お気に入りの似顔絵

## 追悼エッセイ 2

### 日本伝統音楽の研究と先端的現代音楽の創造

—廣瀬量平先生の秘めたる狙い—

きつかわ しゅうへい  
吉川 周平

(前京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長)

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター初代所長、廣瀬量平先生（以下「先生」と記す）が、2008年11月24日に、京都で78歳の生涯を閉じられた。あけて1月9日には館長であった京都コンサートホールで、しのぶ会が行われ、敬愛されていた梅原猛先生が、先生の該博な知識と教養、作品の美しさを稀にみるものとして評価し、オペラを二人で作ろうという約束が残ったことを悔やまれた。

1930年7月17日に函館で生まれた先生は、北海道大学教育学部を卒業後、東京芸術大学音楽学部作曲家に進み、61年に専攻科を修了した。先生は欧米でも評価されている武満徹との相異を、自分は西洋音楽の作曲法を本格的に学んでおり、要望に応じてどんな音楽でも創ることができることだと話しておられたが、日本音楽への接近は自然なものだった。

すなわち、東京芸大卒業後の最初の作

品が、島原の乱を扱った堀田善衛の文学を劇化した舞台の音楽で、「封建時代の日本の農民の無念さは、西洋音楽では表せなかった」ので、「迷った末に、尺八と三味線を用い」たのだという。先生は函館と札幌との相違や、日本人の西洋音楽の演奏についてよく話して下さったが、文化は近くみえるものでも、こまかい相違があり、それを「体でわからなければ、空しい物真似で終わってしま」うという。77年には京都市立芸術大学音楽学部作曲科教授となり、92年から4年間は学部長を務めて、名誉教授の称号を受けられた。

私は風流（ふりゅう）という、京都で生育した文化の一つを研究テーマとし、身体の動きのかたちとその意味を考えてきたのだが、先生のお誘いに従って、京都市の中心部に6年住む機会を得て、日本の文化の中心的課題に直面する重要性を認識させられた。先生の作品を何百回となく演奏してきた西洋人のリコーダー奏者が、先生の美しい音楽が「伝統的な価値観に対する強い感性を有する日本の現代音楽に対し、単に音楽的にだけでな

く文化的に眼を開かせてくれるもの」だということも、京都の文化の中に生きたからだと思われる。

異文化を100パーセントわかることは不可能と識りながら、現代の日本に生きている人間の音楽を創りたいと希求する先生の畢生の作品が、日本伝統音楽研究センターで、その必要性を痛感している芸術家の心からの叫びであったから、その訴えが京都市民に受け入れられて2000年に開設され、初代所長に就任。第一号の所報の所長対談に、東京芸大創立時に邦楽科の必要性を説いた吉川英史を招き、助言を受けている。「日本のことだけをやるのではなく、(中略)西洋のこともわかっていたり、しゃべれたりする人に、日本のことをやってもらいたい」、「あまり、専門化して、自分の専門領域とそれ以外との分け隔てがあってはいけない」などと助言されている。先生は見事な作曲家だ。センター創立の総譜は提出されている。どう演奏していくかは、意思を受け継ぐ所員の手にかかっているのだ。

### 三つの「縁」 — 追想 “廣瀬量平” —

ながひろ ひとし  
長廣 比登志

(元京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授)

それは不思議な「縁」による問柄であった。

(その一) 1960年6月。60年安保の年。二人とも東京芸大の学生。日頃政治問題に無関心の学生が、この時ばかりは国家権力の恐怖に身震いしながら、国会周辺のデモに結集した。私は旗振りの一人だった。今まさに出発という時だったか。「作曲科の廣瀬です。これから行くのですか」。この一瞬の出会いを、なぜか記憶に深く留める。しかし彼とはその後、ずっと雑談のタネにもしたことがなかった。あまりにも深く心を揺さぶられ、やり場のない自分に嫌気がさしたのか。音楽学部100名ほどの学生と、在京音大生も多数デモに参加。機動隊との烈しい衝突の中で犠牲となった女子学生の死を悼み、〈Ave Maria〉(確か Arcadelt 作曲)を合唱した。拡声され怒号となった sprechchor と「インター」が、霞ヶ関に交錯し、デモ隊の靴音がリズムを刻む。彼はあの歌を歌ったのだろうか。

(その二) 1966年3月。私はNHKのリハーサル室で、彼の〈トルソ〉(尺八・箏・三絃・チェロ)と〈霧〉<sup>へき</sup>のリハーサルに立ち合っていた。少しばかり照れくさい再会であった。当時私は、現代邦楽作品の放送番組「現代の日本音楽」の担当ディレクターで、この作品は4月24日

に放送された。彼はこの番組に初登場だった。現代邦楽という用語の社会的認知度はまだきわめて低かった。当時の作曲家達は、邦楽演奏家への直接のコンタクトを通じつつ、いわば手探りの創作活動を展開していた。彼は、フィクション～空想～だと断りながらも、この年代(60年代)を日本音楽史の中で、もっとも魅力ある時代として、将来記憶されるのでは、と予見した。1973年のことばである。彼の先見的な観測力は、この後もたびたび周囲の人々の耳目を引くことになる。

〈トルソ〉も〈霧〉も、演奏者を入れ替えながら何度も放送した。作品の普及・展開は、この番組のおおきな使命だった。(付記。〈霧〉の再録音時に、のちに彼と京都芸大で同僚となる岸邊百百雄がくわわる。)尺八3本と弦楽四重奏による〈霧〉はさらに発展して、仏教法具の金属打楽器を加えた作品となった。1967年NHK委嘱作品の〈療〉<sup>りょう</sup>である。これらの作品によって、彼は武満徹や諸井誠らと並んで、尺八の作曲家として名を残すことになる。

ここまで尺八にのめりこませたのは、北大時代から思索してきた独自の日本文化論、とくに日本人の心性への強い関心が、この時期以降熟成期に入ったことに関係する。そこで彼は云う。「尺八は、良

しにつけ悪しきにつけ、日本人の心の形をしている」(1969年)。

「形」はのちに「象」と表記し、「かたち」とルビを振る。この用字変更の意味は深い。この当時、音楽ジャーナリズムは、尺八ブームを演出していた。彼は密教系声明や、修験道の呪文などの関連を想定していたという。仮説としての可能性がふくらむ。

その後も彼は、尺八の名曲を多く書き残すが、1972年に初めての箏独奏曲<櫻>(高畑美登子委嘱)を作曲してから、次々と箏属の作品を手がける。そして2004年に現・野坂操壽によって製作された二十五絃箏のために独奏曲<浮舟>を書く。作曲活動の出発点に当たる<トルソ>に尺八が参加し、二十五絃箏で生涯を閉じた。2曲とも、委嘱・初演に関わったのが野坂であった。これもまた「縁」であろうか。

(その三) 2000年5月。私はこの研究センター所長室で、彼を待っていた。約束の時間ぎりぎりに飛び込んできた。本部棟で西島安則学長から辞令が渡される。数年前から、東京のホールでたびたび会い、センター設立の進捗状況や京都音楽事情を聞かされていた。しかし一言も京都へ来い、とはいわなかった。京都は私の生地であり、亡父は京都大学に奉職しつつ、京都芸大の前身音楽短大で音楽美学を講じていた。

私を呼んだねらいは二つあると思う。一つは、NHKの部内資料として私が作成

した「現代の日本音楽・作品目録」(1970年)をベースに、放送年表を作ること。いわば業務命令である。番組ノートや番組通知票(控)、プログラムや音声資料、エアチェックのメモ程度しか手元に持っていなかった。この年表を番組でお世話になった出演者に、恩返し印として手渡すのは夢であった。出演者の一人であった彼は、この番組の全貌をどうしても把握したかったに違いない。さらにセンターの研究領域に、古代から現代までという時系列を一本通すという信念も。

私の人事のもう一つのねらいは、あまりにも過度な期待感だったが、放送ジャーナリストとしての現場知見を、センターの組織作りに反映させたいという気持ちが働いたことであろう。TVドラマの仕事などを通じ、NHKに足しげく来局していた彼は、種々雑多な業界情報が飛び交う中で、ジャーナリスティックな感覚も研ぎ澄まされていったに違いない。音楽産業の現場を広く知った彼は、研究センターの運営に関して、interdisciplinaryな接点を広げるとともに、現代の日本文化が求める問題提起をいつも念頭に置くことを強調していた。彼は偉大な作曲家である前に、プロデューサーであり演出家であり思想家であった。こよなく京都の文物を愛し知的風土に遊んだ大人<sup>たいじん</sup>であった。50年におよぶ長い楽の縁。箏舌尽くせぬ楽恩に心よりの謝意を捧げたい。

廣瀬さん。ゆっくりと安らかな旅立ちを。



追悼エッセイ 4

《浮舟—水激る宇治の川辺に— 二十五絃箏のための 2002》について

のさか そうじゆ  
野坂 操壽

(箏演奏家、桐朋学園芸術短期大学特任教授)

廣瀬作品は「トルソ」「十六夜」「櫻—  
箏独奏の為の十段」「くみだれ」による変  
容—二十五絃箏による」を弾かせて戴き  
ました。2002年には、私の委嘱で、「浮  
舟—水激る宇治の川辺に—二十五絃箏の  
ための」を書いて戴くことも出来ました。  
なかなか楽譜が届かず、気をもみつつも  
何とか初演を終えたことを、今思い出し  
ています。

作曲に当たり、実際に宇治川に行かれ、  
文献を調べられ、内面の充実を計られた  
廣瀬先生は、一方でその年、ご病気にな  
られ「僕の最後の作品になるかと思った…」  
と話されました。「浮舟」の持つ深い  
“間”と透明感にそれがよく現わされ  
ていると思います。選ばれた音たちは、  
気高く優しく、時に激しく、その響きは  
崇高です。生きることの矛盾と悔恨を経  
て、天を指向する清らかさに満ちていま  
す。日本的な“間”が生かされ、空間と  
拡がりをもつこの曲は二十五絃箏の傑作  
となり、多くの演奏家たちが次々と取り  
組むようになりました。

初演の折は家に来てくださり、まず見  
せて下さったのが、図書館で見つけられ  
た宇治十帖の浮舟入水のカラーの絵でし  
た。口をきりっと結び、目を閉じた浮舟  
が長い髪を水に靡かせ、両手を合わせて  
水底に落ちていくさまは、美しい中にも

鬼気迫るものがありました。

又、作品の動機・内容・浮舟の心情等  
具体的なお話も伺い、やがて宗教の話に  
までそれは拡がり、洗礼を受けられたこ  
と、私も同じであることなどなどお話が  
弾んだものでした。お若い頃の喧嘩っ早  
い熱気は影を潜め、少年のようなお心と、  
ナイーブな感性が滲み出て、静かな優し  
い方になっておられました。

明けて2004年1月には京都市立芸術大  
学日本伝統音楽研究センター廣瀬量平所  
長退任記念講演が行われました。28日  
には「日本の伝統音楽とその発展」という



タイトルで、光栄なことに私にお声を掛けて下さり、古典曲「みだれ」と先生の作品三曲を演奏しました。29日は「日本の伝統音楽の現在」ということで先生の講演のあと「浮舟」を再演、その時のお話で、印象深く覚えているのは「伝統とは、糠床のようなものである。常に手入れをし、育てていかなければならない」というものでした。

2004年11月には、伊福部昭先生のコンチェルトを大阪・いづみホール迄聴きに来て下さり、楽屋でお話が出来ました。

「又書いて下さると嬉しい」という私に、「浮舟」の第2・第3楽章が書ける、と言われました。「曲ができたなら、リサイタルで弾きますから、ぜひ!!!」。これが良く

なかったと悔やんでいます。日を決めるべきでした。深い思想に裏付けられた人間的な存在感のある音楽を弾く機会を一つ失ってしまいました。

北海道に生まれ、インドを始め世界各国の伝統文化に造詣が深く、三十年近くを京都で過ごされ、そこから発信された音楽は、真の私たちの伝統と深く関わり、未来を志向するものであったと確信しています。

廣瀬先生、ありがとうございました。そしておつかれさまでした。

ご冥福を心からお祈り申し上げ、残して下さった作品を今後も大切に弾き続けて参ります。

## 追悼エッセイ 5

### 廣瀬先生との電話

かんべ ゆきみ  
神戸 愉樹美

(ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者、国立音楽大学非常勤講師)

作品の委嘱を思いついたのは1975年に「イディール」を聴いた時でした。西洋古楽器を奏する日本人として、日本とどう向き合えば良いのか、廣瀬先生の音楽に解があったのです。

念願叶って作曲された『高雅な猫のための組曲』(1990)の演奏回数は、欧米を含めて150回を越えました。「僕は、尺八とかリコーダーとかマイナーな楽器に光を当てて世界に出すのが楽しい。今、ガ

ンバのために必要なのはこういう曲なんだ」と、笑いのある、猫の表情あふれる組曲でした。この曲が一昨年ハワイで開催された環太平洋ガンバ大会の人気投票コンサートで堂々一位を獲得したのも、世界で愛される作品となった証です。

ようやく楽譜を出版し、昨年(2008年)6月にお祝いの演奏会を企画したところ、前々日にお電話で「明後日から入院するので、東京まで聴きにいけれない」と。

その折りに、「私は今、伝音の共同研究2008『胡弓の源流と受容－東西交渉の視点を中心に』に組み込んでいただいて、京都に行っています」とご報告すると、「へえ、そんなこともやってるの」と意外そう。私は日本ガンバ史の執筆のためにキリシタン文書の擦弦楽器名を研究していたのです。話がセンターの立ち上げに及び、「各部屋に電話とFAXを備えるようにしたのも僕なんだよ」と伝音への情熱を語られました。春に委嘱した作品は「12月でいいの?」「はい」と。

廣瀬氏は、演奏会ギリギリに曲が出来上がることで知られた作曲家でした。タイトルが決まると、構想は出来上がっていて、後は書くだけ。演奏に難しい楽章

から送って下さるのですが、当日の朝にFaxで送られたよろよろした五線紙を見ながら初演したこともありました。

11月12日の練習が終わった夜10時半ごろ電話が鳴り、「廣瀬です。タイトルなんだけれど、今回は北海道の小動物にすることにした」と、音がめぐっている様子でした。いつものようにお話をしているうちに、『第1組曲 北の春』（いのち）、楽章は「リスが木をびよんびよん跳ねたり、木の実を取ったりする」、「キタキツネの春の歌」、「カワガニ（沢ガニ?）のロマンス」の3つにしよう。そして、次に『第2組曲 北の秋』は「氷上の鹿たち」「鮭たちはゆく（レクイエム）」と。ところで「春と秋とどっちを先にする?」と仰ったので、「春を」と御願いました。

「僕は明後日の金曜日入院する。12月1日に戻っていないかもしれないから、そうしたら「クロネコ」でも弾いておいてよ」と。その時に「これは遺言だ」と思いました。演奏会では、追悼として『高雅な猫のための組曲』を演奏しました。

先生は、お客様や演奏家の事情を汲んで作曲できる本当に貴重な方でした。この度は最後まで思い遣って下さり、その暖かさや優しさに涙が止まりません。

天国の先生にお電話をすると、「あのね、あのね、今度、僕の曲ばかりのフェスティバルが開催されるの」と嬉しそうな声が聞こえるような気がします。



でんおんエッセイ

## ひとさまの役にたつなんて

いまだ けんたろう  
今田 健太郎

まさか自分の研究が、ひとさま（他人様）の役にたつなんて、これまで考えたことがなかったのである。私のとりあげてきた研究対象は、誰も注目しないようなニッチな現象ばかり。たとえば卒業論文では「初期演歌（バイオリン演歌）」、修士論文以降は「サイレント映画の伴奏音楽」を扱ってきた。あまりにニッチすぎるので、学術業界でいう「一般受け」はもちろん、「役得」のような見返りも生じようがない。

もちろんそのようにしてきたのは理由があったこと。人々がこれまで考えつかなかったような新しい知識と視野をえるための、効果的な起爆剤となりえると信じているからだ。またこれらは限定的な現象とはいえ、幅広い問題圏に応用できるよう、音楽史や芸能史以外の研究領域にも目配りしてきた。その意味では、自分の研究を通じて、なにかしら「他人様の役にたちたい」という気持ちをもっているつもりである。

とはいえ、それはあくまでも学問という抽象的な世界に対する、最終的な目標としてである。だから、誰か具体的な個人に対して、自分の研究がそのまま役にたつことなど考えたことなどなかったのだ。

そんな折り、偶然のことながら、当センターにおいてテレビ番組に出演する機会をえた。それも関西では非常に人気の

高い「探偵！ナイトスクープ」。視聴者からの調査依頼にもとづいて、探偵（タレント）と依頼者によって調査と試行錯誤の過程をロケーションにて収録し、それをスタジオで論評するというバラエティ番組である。

I love you you love me

赤ちゃんができて I don't know

チンチロリンとおとして I don't know

調査依頼の内容は、依頼者（当時 22 歳）の曾祖母（同 96 歳）のうたう、不完全な歌詞とメロディのみしか分からない楽曲がどういうものか調べてほしいというもの。前もってテレビ局から問い合わせを受けていた当センターの竹内有一さんから、歌詞を見せられたとき、初期演歌を聞き漁っていたときの記憶がよみがえった。これは《アイトントノー》ではなからうか。

初期演歌とは、当時は「演歌」と呼ばれていたが、現在の演歌とは異なるためにあえて区別を示した名称である。およそ明治中期から昭和初期まで、大道や縁日で広められた流行歌で、政治の批判や風俗の風刺を読み込んだ歌詞が中心だった。演歌という語が「演（説の）歌」に由来するという伝説からも、そのことはうかがいしれよう。「オッペケペー」や「パ

イノパイノパイ」といえば、まだ一部では知られているかもしれない。

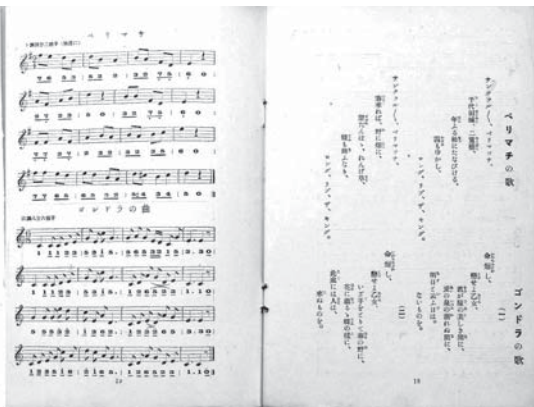
初期演歌の主な担い手は、武士くずれの壮士たちや出世をもくろむ書生たちであったが、そのなかに神長瞭月という人がいた。残されたレコードを聞かざり、よくとおる声の持ち主でかつぜつもよく、優れた歌い手だったと思われる。多くの楽曲や録音を残しているうえ、アイデアマンだったらしく、初期演歌にバイオリンを導入し、それを弾きながら歌うようにした。この工夫は、体制批判を旨とする硬派な一派から、演歌を軟派なものに変質させるものとして批判されたが、バイオリンは次第に初期演歌にとって象徴的な存在となる。

この神長瞭月が作って広めたのが、この《アイドントノー》と呼ばれる楽曲である。これを確認できる最も古い史料である、彼の『獨習自在 ヴァキオリン 新流行歌第一音譜集』（大正5年）には、《ベリマチ》の名で掲載がある。『東京レコー

ド文句集 第1集』（大正6年）にも《ベリマッチ》ででているが（トウキョウ・フジサン 756）、同時期にでたと思われるレコード（ナショナル 特 A265）は《アイドントノー》となっている。

楽曲として定まっているのは、旋律と「アイドントノー」というオチのみである（それらも実は作曲当初とはやや相違するようだ）。歌詞は歌本などに多く残されているが、そのほとんどは、片言の英語話者＝当時の学生や舶来文化かぶれの人々が軽薄な言動をとりながら、結局「アイドントノー」と言ってはばからない無責任な様子をうたう。批判精神にもとづきながらも、諧諷味を加えて笑いに転化させるところは、たとえば「あ～あ～やんなっちゃった」の牧仲二のウクレレ漫談を彷彿とさせる。

調査依頼のあった歌もこの例に漏れない。私の知る範囲にあった、次に挙げる歌詞の例とは、少々異なるものの大意は合致している。初期演歌は、基本的には





レコードに依らずに流行したため、伝承のなかで抜け落ちたり、他の歌詞が付け加わったりしたのだろう。「チンチロリン〜」の一節については、この時点ではよく分からなかった。

サンクフル サンクフル ベリマッチ  
アイラブユー ユーラブミー  
ラブはその日の出来心  
赤ちゃんができたら アイドントノー

番組の収録は2008年7月15日におこなわれた。今日は当センターの事務室で、やってきた依頼者と探偵（タレントの松村邦洋）と出会い、資料室に案内して、楽曲の詳細や作曲者、この楽曲が作られた背景や時代の解説をおこなった。依頼者は当センターを後にしての帰り道、この楽曲を歌い覚えて、曾祖母にうたってプレゼントした（朝日放送にて8月29日

放映）。

その解説は、卒業論文のさいにえた知識がもとであったが、それがこんなふうに役にたつとは思わなかった。とはいえ、依頼者に分かってもらえるように解説ができたのか、まったく自信がない。若い依頼者にいきなり「初期演歌」などと説明しても仕方がないとは気づいていたが、だからといってどんな言葉をかけるべきか、皆目見当がつかなかった。ここで述べたようなことさえ、専門的にすぎるだろう。

自分の研究成果を、学術的な貢献だけでなく、具体的な存在としてのひとさまにどのように伝えるべきなのか。このような機会に恵まれたことに感謝しつつも、残るは悔いばかり。この番組への出演をとおして、当センターが社会に広く知られることがあれば、それも具体的なひとさまへの貢献のひとつではないか、と試してみても、やはり身勝手な独り慰みだろう。

SHORT REPORT  
“Musicking from a uniquely Japanese perspective”

Adrian Tien PhD  
(Department of Chinese Studies,  
National University of Singapore)

It is my great pleasure and honour to write a report based on my academic visit to the Research Centre for the Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts, as jointly funded by NUS-JSPS new scientific exchange programme. The visit was for 33 days, from 15 May to 16 June 2008.

The Research Centre for the Japanese Traditional Music was a most generous and hospitable host, and for being so I must extend a very special thanks to Director, Professor Kubota, and Associate Professor Fujita for everything that they did for me to make my stay a most enjoyable and fruitful one. In particular, Professor Fujita had organised, or helped to organise, a large part of my academic and musical programme there during my stay in Japan, including attendance at lectures and seminars, visits to theatres, concerts, presentations and exhibitions, and access to libraries and archives. I also paid visits to nearby institutions in the Kansai area as well as Tokyo. I collected primary and secondary source materials necessary for my research.

### Impression of Japan

This had been my very first visit to Japan. There were many things that I had learnt and heard about Japan. Since I was young prior to my visit, Kyoto as well as Nara have always been on the top of my priority list if I ever had the opportunity to go to Japan. I certainly wasn't disappointed when I finally had the chance to visit Japan this year, and Kyoto and Nara in particular certainly lived up to the name! I was most impressed by the abundance of ancient cultural sites as well as the serene and/or majestic atmosphere of the temples, shrines, castles and parks. It is ancient and traditional Japan that has been the major attraction for me, so I was keen to soak up as much of the culture and tradition as I could during my stay. In the end, I can't help but to conclude that Kyoto is one of those places that one really needs to visit many times in order to really fully appreciate it in its glory.

---

## Objectives of the visit

I looked into the following questions during my research visit:

- (1) what the meaning of *music* is to the Japanese and the Chinese;
- (2) what function music served/still serves in the daily lives of the Japanese/Chinese people;
- (3) what are the similarities and differences between Japanese and Chinese musicking, given their apparent overlap (at least as per indicated by their shared etymological representation which is 音乐);
- (4) what were the cross-cultural influences between the two musicking traditions; and
- (5) what is the tangible evidence for Japanese and Chinese musicking?

## Description of activities

Christopher Small (1998: 2) put forward the idea of “musicking” – that music is not a thing but a social activity, and it is something that people do. With this in mind, I was interested to examine the above research questions from the perspectives of:

- (1) how Japanese people used to make music traditionally (as a social and musical activity) and what with in ancient times;
- (2) how Japanese people still make music traditionally (as a social and musical activity) and what with in modern times; and
- (3) how Japanese people make music contemporaneously (rather than traditionally, as a social and musical activity) and what with in modern times.

In keeping with these perspectives and research questions, I collected primary and secondary source materials from, *inter alia*, written historical accounts and documents in archives and/or personal collections (such as letter, music manuscripts, diaries, books etc.), sites of historical significance that have had something to do with musicking (temples, shrines and royal residence etc.), musical performances (in oral/aural/visual/written forms), musical artefacts and relics (ancient musical instruments preserved at repositories etc.), as well as interviews and/or consultations with musicians, musicologists, sociologists etc. who have something to say about the tradition of Japanese musicking.

Though based in Kyoto, I made brief visits to important places related to the tradition of musicking in Japan, including Nara, Osaka, Kobe and Tokyo. The more notable activities included the following:



- (1) Attending lectures by Professor Fujita and by other scholars/musicians/musicologists in other universities;
- (2) Establishing academic connections with Professor Fujita and his colleagues as well as scholars from other universities including Kansai and Tokyo;
- (3) Academic dialogues (including presentations) at Kyoto City University of Arts and other universities including Kansai and Tokyo; and
- (4) Visiting sites of historic, cultural and academic significance (libraries, museums, archives, palaces, theatres etc.) .

#### Whether objectives of the research visit were met

This research visit was by all means a successful one, and here I'd like to go through some specifics. In response to the first two research questions, it was clear that the meaning of *music* at least in its contemporary sense is very different to the Japanese from the Chinese, in spite of certain cultural, musical and musicological overlaps. There is also a distinction, perhaps dissociation, of Japanese music in the traditional sense and Japanese music in contemporary sense i.e. how such music appears in the daily lives of the Japanese people. This distinction/dissociation is itself an interesting issue for further academic pursuit.

In connection with research question (3), one of the most conspicuous places to look for similarities and differences between Japanese and Chinese musicking is instrumental music. It is fascinating how, for instance, the ways in which Japanese *biwa* and Chinese *pipa* are played can be so very different and, significantly, hold distinctive social functions even though they originated in the same musical instrument.

Research questions (4) and (5) really are inseparable in the sense that Japanese and Chinese musicking are what they are now due to mutual cross-cultural influences between the two musicking traditions. Some of the phenomena that attest to this are their respective composed songs, theatrical performances, musical aesthetics etc.

Given the number of leads that have arisen from this research trip – of which there are many – I plan to focus my immediate research on the use of *silence* as a musical device and its meaning in Japanese music, and the link with the Japanese language that this device may have. This will be compared with what we have found about *silence* as a musical device in Chinese music as well as its links with the Chinese language. The Japanese word of *ma* 間 represents a *silence*-related

concept which I plan to probe into further, among other possible lexicon in the Japanese language related to *silence*. As a starting point, I've just recently written a draft of a chapter to do with *sound* and *silence*, and I plan to incorporate some of the initial findings into this chapter before the final submission (as a matter of fact, if any of you music scholars has any thoughts or ideas about the topic of *silence* in Japanese music and wouldn't mind sharing these ideas and thoughts with me, please kindly get in contact with me!)

### Future plans

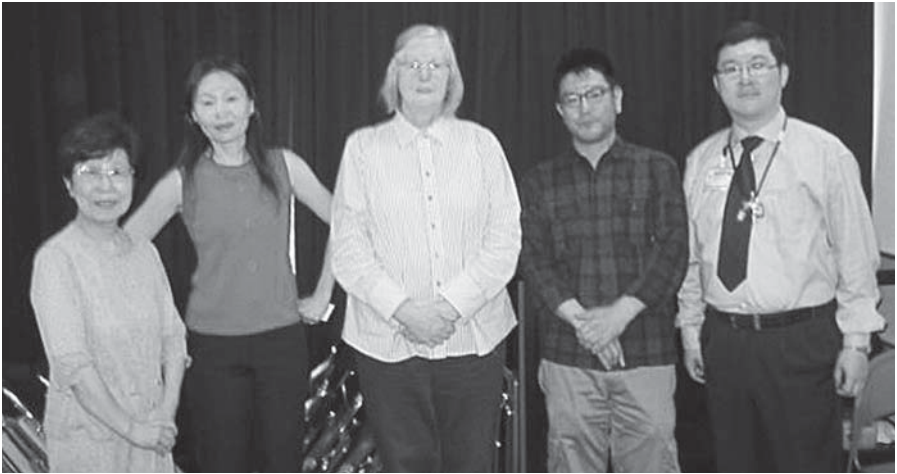
The trip was most rewarding and fruitful to me being my first trip in Japan. I made new discoveries and established academic connections with Japanese colleagues in a way that I would never have had if I never visited Japan. I am so fired up now with new ideas, including research plans in Japan and/or to do with Japan, that I am sure future visits to the country will be in the cards. Several Japanese scholars have commented on how pleasing it is to see someone like myself who is fascinated with Japanese music and musicking. I envision future plans with Japanese scholars for academic exchanges in the way of institutional visits, joint papers, workshops and conferences on the topic of musicking. There are some of us here at NUS who are interested in musicking both from a comparative viewpoint, and so having established scholarly connections with colleagues in Japan means that it will be possible in the future for all of us to share our expertise and examine the related issues together in a more collective capacity.

### Other comments

Academic exchanges are cultural exchanges, too, and I must say how very impressed and deeply touched by the friendliness and hospitality of the Research Centre and of the Japanese people, in general – many of who were prepared to go out of their way to make my visit a pleasant and successful one. I have learned to appreciate the Japanese culture even more, and am now even more motivated than ever to visit the country again not only for work but also to take in more of the culture. I would also like to brush up on my Japanese again. In short, the fond memories of the month in Japan shall remain with me for a long, long time. I would definitely love to have the opportunity to visit colleagues again in the future at the Research Centre.

A big Thank you again, to the Research Centre for the Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Art!

Respectfully submitted,



From right to left: Me, Prof Fujita, Prof Tokita from Australia, Prof Lee from the US, Prof Kubota - Director of the Research Centre for the Japanese Traditional Music

## 客員研究員レポート2

### 日本での研修を終えて

ロージー・リー Rosey LEE  
(2008年度日本伝統音楽研究センター客員研究員  
アメリカ・ボストン パークリー音楽院准教授)

はじめに、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの所長であられる久保田敏子先生に、お礼を申し上げたく存じます。先生には、財団法人国際交流基金2008年度の内田奨学金を得て日本伝統音楽についての研修のため来日した私に、多大なるご支援を賜りました。先生は、日本に伝わるお祭りや文楽公演、演奏会やレクチャー、展覧会などへの様々な機会を与えて下さったほか、資料室も開放して下さい、私の研究を実りあるものにして下さいました。また、私の研修に必要なかつ重要な資料を提供して下さいただけでなく、研修室には優美な箏までも用意して下さい、日本訪問中で最も心温まるおもてなしをいただきました。深く感謝を申し上げます。

## 1. 日本伝統音楽研究センターでの研修—たくさんの資料との出会い—

今回の研修の目的は、楽器、歌唱、民俗音楽を含む日本伝統音楽についての資料収集を、2007年度の内田奨学金に引き続き、この研究センターにおいて進めることでした。

一般に、公私立の様々な機関から日本伝統音楽に関する資料を入手することは、かなり困難です。しかし、研究センターにおける蔵書、CD・DVDのコレクションは、ほかでは得難いもので、特に地歌箏曲に関する資料は、自分の研究にとって大変参考となりました。久保田先生からは、貴重なレコードや書籍をいただきました。「六段」と「乱」のレコード、そして京都芸大が発刊なさった、『日本の伝統音楽を伝える価値』『田邊尚雄・秀雄旧蔵 楽器コレクション図録』の2冊です。レコードには、英文での楽理と実演が収められており、書籍とあわせて、私の研修にとって大きな意味を持ちました。CDにつきましても、箏の演奏、地歌箏曲、雅楽、そして三味線音楽を私の研修中、集中して聴かせていただきました。

六段の五線譜を研究センターで拝見した時は、大変嬉しく思いました。それは、西洋の五線譜のみを読解する音楽家にとって、箏の大変重要なジャンルの一曲を知り、学ぶ事のできる貴重な機会であると確信したからです。

## 2. 学外での研修

今回の大学訪問に先だって、久保田先生と人間国宝の故菊原初子先生のインタビューと、地歌箏曲についてのビデオを拝見しました。久保田先生は、初めて伺った私を忘れてたい温かさでもって迎えて下さいました。先生の、日本伝統音楽に貢献なさっておられる学者としてだけでなく、オープンで親切なお人柄をも尊敬してやみません。

他の研究機関や美術館、寺社仏閣への訪問も、私の研修の重要な要素でした。幸運なことに、京都文化博物館において「源氏物語千年紀展」を、また第59回京都薪能を平安神宮にて鑑賞することができました。ほかに、大阪の国立民族学博物館や、大阪音楽大学、京都の国際日本文化研究センター、東京の宮城道雄記念館などを回りました。また大阪の国立文楽劇場、東京の国立能楽堂、大阪での地歌箏曲の公演を鑑賞いたしました。久保田先生が、公演や演奏の説明をして下さいました。

## 3. 今後の展望など

京都市は、日本伝統文化について研修するには、最適な場所だと思います。今回、研究センターは、私の滞在期間を通して最適な研究環境を用意して下さいました。

滞在中は、沢山の方々とお会いすることが出来ました。田井先生、藤田先生とは、研

究センターの学者交流会（6月5日）にてお目にかかりました。久保田先生と藤田先生には、その際に短いプレゼンテーションと自己紹介の機会をいただきました。（写真参照）

研究センターでの研修は、今回の内田奨学金の研修の中でも、一番大きい意味を持つものでした。再び、このセンターを訪れ研究を続け、より日本文化について学ぶ機会があることを願っております。

研修で得られた成果は、帰国後、バークリー音楽院の研究者や学生達と共有致したいと思えます。また、日本伝統音楽研究センターにて収集した資料、日本の記述法による楽譜、五線譜、英訳された図書、CD、DVDなどはすべて米国へ持ち帰り、今後の研究で使用していく予定です。将来は、若い音楽家同士の繋がりを築き、日本伝統音楽や芸術についてより理解が深まり、またその伝統音楽が継承されていく事を願っております。

最後になりますが、久保田敏子先生の日本の音楽学への貢献と研究に取り組む熱意に感動いたしました。私にとって尊敬する理想の先生でありました。先生の日本伝統音楽研究の成果をアメリカでも発展させることが出来るよう願っております。また、国際交流基金内田奨学金のアドバイザーを務めて下さった高瀬千賀子先生にもお礼を申し上げます。全ての日本語資料の理解を助けて下さり、研修のすべての立案、手配だけでなく、日本における貴重な体験をさせて下さいました。そして、研究センターの皆様、得がたい経験をさせて下さったことに対し、心から感謝を申し上げます。



## センターニュース

平成 20 (2008) 年度

## 人事 採用と異動等

◇平成 20 年 4 月 1 日

所長 久保田敏子 (新任)

教授 山田智恵子 (新規採用)

非常勤講師 家塚智子 (新規採用)

非常勤講師 今田健太郎 (新規採用)

非常勤講師 大谷 (寺田) 真由美 (新規採用)

◇平成 21 年 3 月 31 日

非常勤講師 上野正章 (任期満了)

## 客員研究員の受け入れ

客員研究員として、2 人の外国人研究者の受け入れをおこなった。

1 人目は、シンガポール国立大学中国研究学部 (Department of Chinese Studies, National University of Singapore) の助教授 (assistant professor) Dr. Adrian Tien (田映春博士)。日本学術振興会による招聘で、受け入れ期間は平成 20 年 5 月 15 日から平成 20 年 6 月 16 日までの 33 日間 (受け入れ担当: 藤田隆則)。研究テーマは、"Musicking from a uniquely Japanese perspective" (とくに日本を通じてみたミュージッキング (音楽的活動) について)。

2 人目は、米国ボストンのバークリー音楽院聴音学科 (Ear training Department,

Berklee College of Music) の准教授 (Associate

Professor) Dr. ROSEY LEE (ロージー・リー博士, 台湾出身アメリカ国籍の女性研究者、専門は作曲)。国際交流基金 2008 年度内田フェローシップを受けて、平成 20 年 5 月 21 日から平成 20 年 7 月 16 日までの 77 日間を受け入れた。(受け入れ担当: 久保田敏子)。研究テーマは、日本の伝統音楽、特に地歌箏曲の歴史と楽理、特に日本の明治以前の音階についての研究。「成果をバークリー音楽院における授業に還元し、日本伝統音楽の国際交流に役立て、また箏を使用した曲作りに発展させて、新しい創作の可能性を世界に向けて発信していくこと」を目的とした。

なお、両研究員による小報告を本報に収載した。 (久保田敏子・藤田隆則)

## 学術出版物

## ◆『日本伝統音楽研究』第 6 号

## 日本伝統音楽研究センター研究紀要

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2009 年 3 月 31 日、B5 2 段縦組・1 段横組 97pp.

<論文> 中安真理: 臥箏篋考一図像と文献による、発生・形態・伝播についての再検討一、<調査報告> 田井竜一:

京都祇園祭り 船鉦の囃子、<報告>  
後藤静夫：地方人形座の活性化—香川  
県・讃岐源之丞座を例に一、<資料>  
横山佳世子：『楽道』記事検索一覧

◆『祇園囃子の源流に関する研究』

日本伝統音楽研究センター研究報告3  
田井竜一編、京都市立芸術大学日本伝  
統音楽研究センター発行、2008年12  
月10日、A5 1段縦組 152pp. (2004  
～2006年度共同研究「祇園囃子の源流  
に関する研究」の成果)

◆『民俗芸能における神楽の諸相』

日本伝統音楽研究センター研究報告4  
吉川周平編、京都市立芸術大学日本伝  
統音楽研究センター発行、2009年3月  
30日、B5 2段縦組 176pp. (2003～  
2004年度プロジェクト研究「民俗芸能  
における神楽の諸相」の成果)

◆『文政元年版『歌曲時習考』収載の現  
行曲研究～詞章翻刻と現行の異同検証  
～』日本伝統音楽研究センター資料集  
成第7巻

久保田敏子編、京都市立芸術大学日本  
伝統音楽研究センター発行、2009年3  
月31日、A4 縦組 180pp. (2008年  
度共同研究「地歌作品研究～初出本と  
現行との詞章異同を中心に～」の成果)

◆(音楽CD) 幸若舞<安宅><敦盛>  
—平成20年度公開講座における上演—  
京都市立芸術大学日本伝統音楽研究セ  
ンター編集・発行、2009年3月31日、  
CD1枚

催 事

(平成19年度補遺)

◆平成19年度第3回公開講座「松囃子—  
足利義教が高めた芸能のかたちと意味—」

日時：2008年2月10日(日)午後2時  
～4時30分

場所：ウイングス京都イベントホール  
挨拶：潮江宏三(京都市立芸術大学長)  
講演：吉川周平(京都市立芸術大学日  
本伝統音楽研究センター所長)「日本  
の伝統音楽・芸能と日本文化の特質  
—松囃子を中心に」

実演：松囃子御能保存会による菊池の  
松囃子(熊本県菊池市)

コメンテーター：山路興造(芸能史研究  
会代表委員・民俗芸能学会代表理事)  
総合司会：藤田隆則(本学准教授)

受講無料、受講者数：約270人

内容報告：

この公開講座は、吉川周平所長の退  
職を記念しておこなわれた。趣旨は次  
のとおりであった。「室町幕府第六代将  
軍の足利義教は、鹿苑寺金閣を作った  
義満の子で、慈照寺銀閣を作った義政  
の父です。金閣や銀閣は国宝の有形文  
化財ですが、義教は無形文化の分野で  
画期的な仕事をしました。それは新年  
を祝う松ばやしの芸能を発展させたこ  
とです。大名の一族郎党による大名松  
ばやしや、町女房たちによる女松ばや  
しの風流は、史上空前のパフォーマンス  
でした。そのうえ観世に始めさせた  
祝言の芸能と能の会は、幕府の新年の  
儀式として、能が武家の式楽となる基

となったと思われます。熊本県からお招きする菊池の松囃子をご覧いただき、失われた京都の文化を思い浮かべていただけたらと思います(チラシより)。

当日は、吉川氏の講演にくわえ、九州の菊池から松囃子御能保存会による実演がおこなわれた。それに続いて、山路興造氏が、松囃子についての最新の研究成果にふれつつ、吉川氏の講演にたいしてコメントを寄せられた。白熱したやりとりでクライマックスをむかえ、終わりの時間となった。当日の様子は、ホームページ掲載の学長挨拶、および写真も参照していただきたい。

(藤田隆則)

(平成 19 年度補遺)

#### ◆平成 19 年度第 4 回公開講座

「地歌箏曲の楽しみⅡ～箏手付の妙味で楽しむ洛中洛外絵巻」

日時：2008 年 3 月 9 日(日) 14 時開演  
場所：京都芸術センター講堂

共催：京都芸術センター、入場料：2000 円  
企画・監修：久保田敏子

趣旨：

平成 19 年度の共同研究『演奏研究～天保 3 = 1832 年刊<千重之一重>収載の箏手付検証～』(研究代表久保田敏子)における研究成果を、レクチャー・コンサート形式による公開講座の形で発表した。

地歌は、江戸時代から社交の潤滑油として人々が楽しんできたが、それは「平家」を語る琵琶法師が初めて手にし

た三味線で「はやり歌」を弾き歌いしたことに始まるが、やがて庶民に浸透すると共に三味線の替手や、箏の手を付けて楽しむようになった。すでに天保 3 = 1832 年には箏の替手を記した『千重之一重』という楽譜集が京都で出版され、箏の手付楽譜の嚆矢となる。

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターでは、この『千重之一重』の楽譜を復原して、現在各派に伝わっている伝承との違いを検証する共同研究を行った。その結果、多少の相違は有るものの、大差なく各派に伝承されていることが分った。

今回は、そうした先人の楽しみを今に生かした箏の替手に焦点を当てて、『千重之一重』掲載の 58 曲の中から、京都を題材とした代表的な地歌を取り上げて公演した。

なお、現行楽譜と『千重之一重』掲載の楽譜を現行記譜法に改めたものと比較対照譜を作成し、地歌箏曲を演奏する聴衆のためにも資料として、解説書とともに配付。

レクチャー・プログラム解説：久保田敏子・井口はる菜・中井猛・野川美穂子

演奏・資料楽譜作成：伊藤志野・岡田慎太郎・奥村雅楽智・片岡りサ・菊中央雄司・菊信木洋子・富緒清律・西川かをり・福田千栄子・三好晃子・横山佳世子(共同研究員)

演奏曲目：

1. 西行桜(粹屋孫八作詞、菊崎檢校作曲、八重崎檢校箏手付) <能「西行



桜」に拠り、都の桜名所を歌う>三弦：富緒、箏：横山。

2. 園の秋（三井次郎右衛門高英作詞、菊岡検校作曲）<島原遊廓の揚屋の庭に咲く秋草を歌う>三弦本手：岡村、替手：福田。
3. 宇治巡り（田中幸次作詞、松浦検校作曲、八重崎検校箏手付）<宇治茶の銘を詠み込みながら宇治の情景を歌う>三弦：菊信木、箏：西川。
4. 貴船（小谷立静作詞、藤林検校作曲、河原崎検校箏手付、八重崎検校箏替手手付）<能「鉄輪」を踏まえ、丑の刻参りに貴船神社へ行く道中を歌う>三弦：伊藤・三好、箏本手：奥村、箏替手：横山。
5. 嵯峨の春：（松浦検校作曲、浦崎検校箏手付）<能「放下僧」を引用して、嵯峨野、嵐山近辺の春を歌う>三弦：菊央、箏：片岡。

（久保田敏子）

◆平成20年度第1回公開講座

「祇園祭り 鶏鉦の囃子」

日時：2008年5月31日（土）午後2時～3時30分

場所：京都芸術センター フリースペース  
実演：鶏鉦囃子方

お話：森章太郎氏（鶏鉦囃子方代表）

司会・進行：田井竜一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授）

共催：京都芸術センター

趣旨（チラシより）：

京都の祇園囃子をご紹介するシリーズの第2弾として、鶏鉦の囃子を取りあげます。

囃子方の方々をお招きし、囃子の曲目や楽器とその奏法などについての詳しい説明や、デモンストレーションも交えながら、その魅力に迫ります。

鶏鉦の囃子の素晴らしさを、じっくりとご堪能いただければと思います。

内容：

1. 日本伝統音楽研究センター所長挨拶
2. 実演1：デモンストレーション演奏



〔〈常空(じょうもく)〉—〈萬歳〉、〈若〉  
(一つ)〕

3. 対談形式による解説・デモンストレーション 森氏+田井

—休憩—

4. 実演2：通し演奏 [〈地囃子〉、〈都  
舎(はずみ)〉—〈地囃子〉—〈帛(と  
ら)〉—〈戻り)地囃子〉、〈松〉—  
「〈松〉の返シ」、〈鶏〉—「〈鶏〉の  
返シ」、〈若〉(三つ)]

5. 質疑応答

配布資料:解説レジュメ、センター概要、  
京都市立芸術大学関係の催し物チラ  
シ、アンケート用紙

報告:

鶏鉦の囃子の特色を、担い手の解説  
やデモンストレーションをまじえて、  
ひとあたり紹介できたとかんがえてい  
る。参加人数は210名であった。

一般参加者に対してのアンケートに  
よると、「普段接している祇園祭りで、  
祇園囃子があのような仕組みになっ  
ているとは全くしらなかったの、とて  
も興味ももてた」といった意見が多く、  
好評であった。また、参加者・演者の  
双方から、会場の形式・設営・大きさ  
や座り方などがちょうど良く、一体感  
があって非常に良かったという意見が  
あった。さらに、今後もこのような形で、  
祇園囃子や京都の諸芸能を紹介してほ  
しいという要望が多数よせられている。

以上のことから、今回の公開講座の趣  
旨は、参加者によく理解してもらえたと  
おもわれる。今後も、京都芸術センター  
と共催で、今回のような担い手に話をじ

っくりとききながらすすめる、レクチャ  
ー・デモンストレーションの形式で、京  
都の民俗芸能を紹介するシリーズを実施  
していければとねがっている。

(田井竜一)

#### ◆平成20年度第2回公開講座

「都市における西洋音楽の受容—松江市  
昭和2年秋の例を中心に—」

日時：2008年12月4日(木) 午後2  
時～午後4時30分

会場：京都市立芸術大学 日本伝統音楽  
研究センター合同研究室1

講師：上野正章(当センター非常勤講  
師)、大西 秀紀(立命館大学非常勤  
講師)、技術協力：亀村正章

企画・構成：上野正章

受講料：500円、受講者数：約20名

内容報告:

上野正章氏の企画・構成による第2  
回公開講座は、次のような趣旨のもと  
でおこなわれた。「昭和2年の秋、松江  
市において開催された演奏会を、写真  
やSPレコードをまじえながら再現しつ  
つ、日本における西洋音楽が一都市に  
おいてどのように受け取られたのかを  
考えていきます。また、当時どのよう  
に録音が行われたか、SPレコードがど  
のように楽しまれていたかについても  
わかりやすく解説します」(チラシよ  
り)。

内容としては、二部構成で、新聞記  
事から当時の西洋音楽のコンサートの  
雰囲気をも再構成するのが第一部であ  
った。上野氏の講演「一都市における西

洋音楽の受容—松江市昭和2年の秋の例を中心に」は、コンサートがおこなわれるまでの期間に、新聞がどのように、観客の期待を高めていったかということが、つぶさに紹介された。その上で、当時のプログラムをSP録音で再生するという試みであった。第二部は、いわばその裏側に焦点をあてた試みだった。大西氏による講演「明治・大正期の録音—再生技術」は、当時の録音吹き込みがどのような空間でおこなわれたのか、ということを生き生きと再現してくれた。

この公開講座は、伝音セミナーの特別企画というかたちでおこなわれたため、平日午後の開催であった。また、有料の企画としておこなった。そのため、参加者は少な目だったが、充実した発表とともに、濃密な時間がながれた。

(藤田隆則)

#### ◆平成20年度第3回公開講座

「胡弓の謎を探る—その源流と魅力—」

日時：2009年1月12日（月・祝）午後2時～5時

会場：日本伝統音楽研究センター合同研究室1

定員80名（参加者約100名）

受講料500円

講師：加納マリ（武蔵野音楽大学講師）、  
神戸愉樹美（国立音楽大学講師・ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者）、杉浦聡（埼玉大学講師、胡弓奏者）、竹内有一（センター准教授）

コメンテーター：泉万里（日本美術史）

企画・進行：竹内有一

趣旨（チラシより）：日本唯一の弓奏楽器「胡弓」が、いつ、どこで、どのように受容されるようになったのか、絵画や東西の文献を通じて再考し、楽器の実演を交えて、その音楽の魅力に迫ります。

内容：

開会あいさつ（久保田所長）

1. 序説—胡弓の源流と受容—（竹内）
2. 17世紀の絵画資料からわかること（加納、泉）
3. キリシタン起源説の検証と考察（神戸）
4. 胡弓の魅力と現在（杉浦）

配布資料1冊（12pp、竹内監修、各講師執筆）：プログラム、講座のコンセプト、17世紀の胡弓を描いた絵画例（図版12点）、関連年表、キリシタン起源説の検証と考察、曲目解説（八千代獅子・鶴の巣籠）、講師紹介、参考文献の一例報告：

2008年度センター共同研究「胡弓の源流と受容—東西交渉の視点を中心に—」（研究代表者：竹内有一）における研究成果の一部公開と、胡弓という楽器に広く親しんでもらうことを目的とした。共同研究員でもある加納・神戸・竹内による、研究成果を平易に解く講演や、調査対象となった絵画・文献資料等のプレゼンテーション、そして胡弓古典曲の演奏とお話（杉浦）の三つを軸に進めた。とくに、17世紀の絵画資料から読み取れる、楽器や演奏方法等の描画内容について、実践的に検証し得る側面と、絵画資料の成立事情な

ど書誌的に規定される側面とを、突き合わせて考察した。後者に関する共同研究での課題や成果を報告するために、泉万里氏にコメンテーターとして加わっていただいた。杉浦・神戸講師による、東西の楽器を手にしたデモンストレーションの前評判が高かったためか、予測を大幅に上回る受講者を集めた。講座修了後ひきつづき、共同研究会主催として、約45分ほど意見交換会を行い、関東など遠方の研究者からも多くの提言をいただいた。(竹内有一)

#### ◆平成20年第4回公開講座

「幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉」

日時：2009年2月7日(土)午後2時～5時

会場：ウィングス京都

講演：家塚智子(当センター非常勤講師)、小林健二(国文学研究資料館教授)

上演：幸若舞保存会による幸若舞〈安宅〉〈敦盛〉

総合司会：後藤静夫(当センター教授)

受講料：1000円、受講者数：約220名

内容報告：

当日は、次のような趣旨のもとで開催された。「幸若舞は、戦国武将らに愛好されたことでよく知られる芸能です。中でも〈敦盛〉は「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻のごとくなり」の文句で有名ですが、実際には、どのような芸能なのでしょう。能とはどのように違うのでしょうか。本講座では、福岡県みやま市瀬高町大江で、現在も幸若舞を伝えておられる保存会の方々をお招きし、幸若舞が今に伝えられているその姿を、解説をまじえつつ鑑賞していきます」(チラシより)。

開会の辞、所長挨拶につづいて、第一部、家塚智子氏による講演「曲舞から「幸若舞」へ」、小林健二氏による講演「幸若舞曲の文芸世界」が行われた。家塚氏の講演は、室町時代に幸若舞がおかれていた場所、そして現代の伝承にいたるまでの流れをコンパクトに概説するものであった。小林氏の講演は、幸若舞曲がなぜ、室町時代の武士にひろくうけいられることになったかの理由をあきらかにすべく、文学的な内



容の特徴を具体的に指摘した。第二部では、幸若舞保存会による〈安宅〉と〈敦盛〉の上演がおこなわれた。〈敦盛〉の上演は、短かったため、2回繰り返して上演していただいた。当日の様子については、CDを作成して販売する。

#### ◇公開講座イベント

「幸若舞の伝承と復元—鑑賞に向けたワークショップ」

日時：2009年2月6日（金）午後2時～午後4時30分

会場：京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター合同研究室1

研究発表：藤田隆則（当センター准教授）、沖本幸子（青山学院大学准教授）

ワークショップ：幸若舞保存会

受講料無料、受講者数：約70名

内容報告：

このイベントは、翌日の幸若舞鑑賞をより有意義にするための、鑑賞のポイントを伝えることを目的として企画された。まずは、藤田が「幸若舞の伝承と復元—主として音曲の構造に注目して」という研究発表をおこなった。さらに、それを補足するべく、中世の歌謡を研究する沖本幸子氏が「白拍子から曲舞・幸若舞へ—拍子舞の系譜」という研究発表をおこなった。第二部は、幸若舞の伝承に焦点をあて、保存会の現会長である松尾正巳氏、および以前に会長をつとめられた江崎恒隆氏に壇上にあがっていただき、伝承における様々なご苦労や、新しい節付にさいしての困難などについてのお話をいただいた。そして、後半は、幸若

舞ワークショップと称して、保存会会長に実際に、敦盛のテキストを声にだしてもらい、それを参加者でなぞるということをおこなった。また、独特のお辞儀や足拍子などのデモンストレーションもしていただき、次の日の鑑賞につなげた。なお、この日は、全30頁のパンフレットをあらかじめ配布し、次の日まで目にとおしてもらおうようお願いして、閉会とした。（藤田隆則）

#### ◆連続講座

大学における社会教育の可能性をさぐるべく、平成20年度より、「日本伝統音楽の資料を読む—伝統芸能をよりよく鑑賞するために」というタイトルのもとで、市民対象の伝統音楽連続講座を開設した。

これは、われわれが得意とするところである、音楽資料を読み解く作業を中心にしつつも、一般の人にはなかなか難しく教養の対象となりつつある古典芸能や伝統音楽を適切に理解するためのポイントを開示するということが目標にする、という欲張りな理想をにかけて、はじめた講座である。

趣旨は次のとおりである。「京都では、伝統音楽・芸能の公演、神社や寺院での儀礼等が身近な場所で数多く行われています。それらの鑑賞をより深めるためには、意味や背景をよく理解することが必要です。この講座では、歴史的資料（番組、番付、絵図、記録類）、口伝書、楽譜等の演奏資料を紹介し、実習形式で読み進めていきます。能に

関心はあるものの、理解する手がかりが得られないと感じられる方、能をより深く鑑賞したい方、楽譜、技術書、伝書等に興味のある方など、熱心な皆様のご参加をお待ちしています」(チラシより)。

市民講座、しかも連続の講座の運営は、とても難しい。何が難しいかというと、たとえていえば、学校の授業で、毎回参観日がつづくような、そんな難しさである。毎回どこにも逃げ場がないのである。「これこれのことがある」という情報を提示するだけでは、聞き手は動いてくれない。「これこれのことがある、これを知っていると、さらにとどのようなことがわかる」という見通しまで、こちらが予告していかなければ、聞き手はなかなか次の週まで興味を持続してはくれないのである。そういう意味で、連続の市民講座というのは、われわれにとって試練であるが、次年度も続けていき、日本伝統音楽研究センターにおける、社会教育の目玉

となっていくようになっていくことを、せつに願う次第である。めざせ、コレージュ・ド・フランスなのである。以下、今年度の前期と後期の概要を、簡単にしめしておく。

#### ◇平成 20 年度前期連続講座

「中世芸能の資料—能をよりよく鑑賞するための背景として」

講師：藤田隆則（当センター准教授）

開講日：5月7日、5月14日、5月21日、  
5月28日、6月4日、6月11日、6月18日、6月25日、7月2日、7月9日（全10回）

毎水曜日 10時40分～12時10分

会場：京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター合同研究室1

講座内容（チラシより）：

室町初期に成立した能は、現在でも演じられますが、理解が及ばず敷居が高いと思っておられる方も多いでしょう。この講座では、能の背景となる中世の芸能諸ジャンル（神楽、声明、雅楽、平家琵琶、幸若舞等）に触れな



がら、能の作品構成や舞台演出を解剖します。

◆平成20年度後期連続講座「近世芸能の資料—三味線音楽に親しむ秘訣—」

講師：竹内有一（当センター准教授）

開講日：10月8日、10月15日、10月22日、11月5日、11月12日、11月19日、11月26日、12月3日、12月10日、12月17日（全10回）

毎水曜日 10時40分～12時10分

会場：京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター合同研究室1

講座内容（チラシより）：

南座の顔見世や都をどり等を見に行くと、魅力的な三味線音楽に出会います。歌詞が難解だから親しみにくい、と思ってしまうのは間違いです。近世（江戸時代）の人々が気軽に読み眺めた、うた本・浄瑠璃本、プログラム、錦絵等を解説しながら、三味線音楽の成り立ちやあり方について考えてみましょう。変体がなを読む実習を中心に行いますが、初めての方でも大丈夫です。

（藤田隆則）

◆伝音セミナー

平成20年度の伝音セミナーは、前年に引き続き「日本の希少音楽資源にふれる—SP盤にきく幻の音—」というテーマで開催された。

伝音で、SP盤などの希少音楽資源を紹介する催しは通算すると3年目となるので、広報活動も順調に行われ、毎回参加して下さる固定ファンも見られるようになった。また、今年度より、

大学の授業時間に合わせて開始時間を14時30分からとしたため、学生が参加しやすくなった。SP盤の試聴というと、比較的年齢層の高い参加者が多いが、若い学生にも新たな研究素材としてのSP盤に目を向けてもらう機会が増したと思う。

担当者は、それぞれの専門分野のテーマや、専門分野から少し離れて新しい知的興味に基づくテーマを設定して、かなり周到に準備をおこなった。たとえば、第2回「花街のうたを聴く—近代日本の女性ボーカリストたち—」（担当：竹内有一）は、京都ならではのテーマといえ、マスコミの関心をひき新聞報道もされた。また、「寄席の音曲芸」や「映画説明」レコードなど、いわゆる古典芸能だけではない多様な音源資料が扱われ、SPレコードの世界の広がりを実感できた。

今年度も、音源の準備にあたって、亀村正章氏にお世話になった。センター所蔵のSP盤のみならず、各担当者所蔵の音源を使用することも多くなり、亀村氏のお手を煩わせた。しかし、毎回最後には蓄音機でSP盤を生再生して、デジタル処理していない音も聴いた。雑音のなかにも音に厚みと暖かみがあって、ほっとしたのは筆者だけではなかったことだろう。

以下、平成20年度のタイトルと担当者等を記しておく。

会場：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1

時間：原則として第1木曜日 午後2

時 30分～4時30分

(山田智恵子)

参加費：無料、定員：先着50名

- \* 第1回 5月8日(木)「明治大正期の能の名手たち—謡と鼓を中心に」  
進行：藤田隆則
- \* 第2回 6月5日(木)「花街のうたを聴く—近代日本の女性ボーカリストたち—」進行：竹内有一
- \* 第3回 7月3日(木)「祭礼囃子のSPレコードをきく」進行：田井竜一
- \* 第4回 9月4日(木)「俗謡—端唄・小唄・俗曲など—を聴く」進行：久保田敏子
- \* 第5回 10月2日(木)「明治期の長唄と義太夫節をきく—レコードと楽譜の接点」進行：山田智恵子
- \* 第6回 11月6日(木)「義太夫節—美声? 難声?」進行：後藤静夫
- \* 第7回 1月8日(木)「寄席の音曲芸を聴く—立花家橋之助を中心に」進行：寺田真由美
- \* 第8回 2月5日(木)「映画説明レコードとはなにか?」進行：今田健太郎

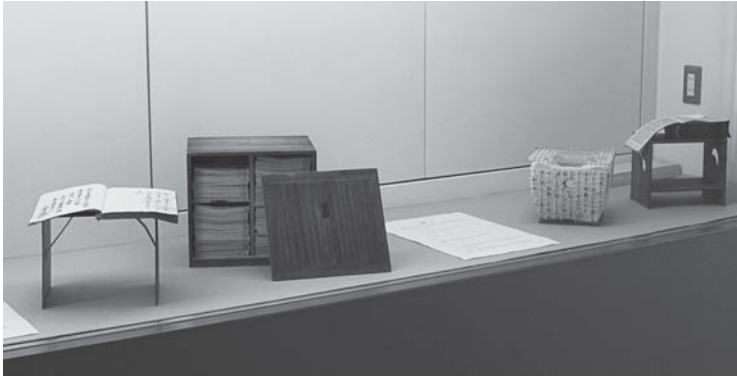
## ◆展観ギャラリー

日本伝統音楽研究センターでは開設以来、7階展示スペースにおいて、特定の研究テーマに即した文献・楽器・パネル等を展示解説している。2006年10月からは継続的に1～2件ずつの展観を行っており、2008年度は下記のような内容であった。いずれも、センター研究員が企画・構成を行い、学芸員が制作と実務補助を行っている。

- \* 2008年1～4月「正本(詞章本)のいろいろ—義太夫節を中心にして—」構成：後藤静夫
- \* 2008年4月～8月「センター所蔵の祇園祭画像資料」構成：田井竜一
- \* 2008年4月～9月「謡本入門」構成：藤田隆則
- \* 2008年9月～2009年1月「胡弓とその周辺」構成：後藤静夫、山田智恵子、竹内有一
- \* 2008年10月～12月「郷土出版物に







おける音楽書の現在－日本海地域を中心－」構成：上野正章

\* 2009年1月～「寄席高座の音曲芸活動写真館の起源をめぐって」構成：寺田真由美・今田健太郎

\* 2009年2月～「でんおん楽器コレクション」構成：山田智恵子

なお、2009年4月現在の公開日時は、「伝音セミナー」「連続講座」開催日の10時～17時、および閲覧室の利用可能な日時（webに掲載）となっている。人数や目的により、その他の日時での閲覧や、担当者によるギャラリートークが可能な場合もあるので、ご希望のかたはセンター専任教員か学芸員に問い合わせいただきたい。（竹内有一）

### 資料の収集・保存

日本伝統音楽研究センターの資料は、現在、試行として一般公開がおこなわれているが、平成21年度からは、本格

的に、図書室として開室することが決まっている。そのための移行措置として、今年度は、通常の資料受け入れ手続きにくわえて、所蔵資料の一部を付属図書館と同列に検索できるよう、システム移行することが決まり、そのための作業を開始した。具体的には、一般書として公開できる資料については、従来アルタイズを通じて管理されている資料を、附属図書館と共通のシステム（LINUS）にも同時にのせていくという作業をおこなってきた。この作業は、20年度ではまだ完結せず、21年度も、さらに継続されることになっている。

また、センターの伝統音楽関係の図書については、これまで独自の分類方法をとった配架をおこなってきたが、資料数の増大にともない、排架に混乱をきたす（資料が簡単に見つからない）ようなことが発生してきた。これに対応するため、今年度は、従来の分類ラベルに、著者記号をつける、また、

いくつかの項目にたいしては補助表を適用する、などといった作業をおこなひ、排列がより効率的におこなわれるよう、改善をはかった。（藤田隆則）

### 委託研究

2008年度は、以下2件の研究業務を、外部の研究者に委託した。

#### ◇大西秀紀「大西秀紀氏所蔵の日本の伝統音楽 SP レコードの復刻」

SPレコードの復刻においては、イコライザーの調整や回転数・ピッチの調整など、様々な専門知識と経験を必要とする。特に、日本音楽のSPレコードの復刻を信頼してまかせられる人は数少ないのが現状である。

そこで、日本音楽のSPレコードの復刻経験が豊富である大西秀紀氏に、氏所蔵の日本の伝統音楽SPレコードの復刻作業（デジタル化）と、様々な諸資料と照合し、内容の確定や関連情報の研究をおこなうドキュメンテーション（資料化）を委託した。

#### ◇奥中康人「田邊尚雄の著作目録データベースの作成と検証」

田邊尚雄は日本における、日本・諸民族の音楽研究のパイオニア的な存在であり、近年その再評価が様々な形でおこなわれている。当センターにおいても、氏旧蔵の貴重な資料（蔵書・楽器・音響資料等）が寄贈されている。

田邊尚雄の著作目録を作成・検証することは、田邊尚雄の著作および業績を再検討する際の基本資料となり、さらにそれは、今後の日本や諸民族の音楽研究を推進する示唆を与えることに貢献する。また、作成された著作目録は、センターにおいて、田邊氏旧蔵の資料を一層活用するのに大いにやくだつことになる。

そこで、近代における音楽研究史の一人者である奥中康人氏に、データベースの作成とその検証を委託した。

（田井竜一）

## プロジェクト研究・共同研究の報告

平成20(2008)年度

### 〈プロジェクト研究〉

#### 音楽・芸能史における芸術化の諸問題

(新規)

研究代表者：後藤静夫

＜共同研究員＞ 石山祥子（日本学術振興会特別研究員）、今田健太郎（本センター特別研究員）、上田学（立命館大学大学院）、奥中康人（大阪大学大学院招聘研究員）、笹川慶子（関西大学准教授）、笹原亮二（国立民族学博物館准教授）、澤井万七美（国立沖縄工業高等専門学校准教授）、末松憲子（人と防災未来センター専門員）、竹内有一（本センター准教授）、竹原明理（大阪大学大学院）、龍城千与枝（早稲田大学大学院）、寺田詩麻（共立女子大学非常勤講師）、寺田真由美（本センター特別研究員）、土居郁雄（国立文楽劇場）、廣井榮子（大阪教育大学他非常勤講師）、細田明宏（帝京大学准教授）、真鍋昌賢（大阪大学助教）、横田洋（大阪大学総合学術博物館研究支援推進員）

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターにおける、2005年度から2007年度の3年間にわたる「近代日本における音楽・芸能の再検討」プロジェクトでは、音楽・芸能にとって「近代」とはいかなる時代であり、音楽・芸能はどのように「近

代」に対応してきたかを検討した。

本プロジェクトでは、それらの検討を下敷きとして、音楽・芸能の「芸術化」の諸問題を、消滅し或いは「芸術化」しなかった事例も含め、議論・検討してゆく。その際、前プロジェクトの視点に加え、音楽・芸能の歴史叙述、関係者の言説、研究史等の再検討も行う。必要に応じて「前近代」の事例も取り上げたい。（なお、開催場所は特に断らない限り、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室2である）

#### \* 第1回研究会

2008・06・14（土） 発表：笹川慶子（コメンテーター：真鍋昌賢）「声と映像から日本映画を考える—浪花節映画を例として」

発表：奥中康人（コメンテーター：寺田真由美）「日本におけるラップの土着化と音楽研究」

#### \* 第2回研究会

2008・07・19（土） 発表：上田学（コメンテーター：今田健太郎）「映画『紅葉狩』の同時代における二面性」

発表：末松憲子（コメンテーター：細田明宏）「伝説をめぐる近代の諸相」

#### \* 第3回研究会

2008・08・10（日） 発表：土居郁雄「忘れ去られた活人形師・山本福松の軌跡」

発表：横田洋「連鎖劇前史—明治期の演劇と映画の関係に関するいくつかの事例をめぐって」

\* 第4回研究会

2008・11・29（土） プレゼン：真鍋昌賢「女流の声—浪花節演者によるジェンダーの再生産」

発表：寺田詩麻「明治10年前後の新富座—宝樹座の名義のことなど」

\* 第5回研究会

2008・12・20（土） 発表：寺田真由美（コメンテーター：真鍋昌賢）「昭和30年代の小唄ブーム中に起きた小唄の芸術化のプロセスについて」

発表：澤井万七美「琵琶と活動写真／映画」

\* 第6回研究会

2009・02・08（日） プレゼン：今田健太郎（コメンテーター：寺田詩麻）「秋田柳吉編『御代の瑞』とはなにか？」

発表：石山祥子（コメンテーター：真鍋昌賢）「黒川能・演目争奪戦における「熱情」— '67年資料をめぐって—」

\* 第7回研究会

2009・03・08（日） 発表：寺田詩麻（コメンテーター：横田洋）「『歌舞伎劇の将来』をめぐって—岸田国士と歌舞伎」

発表：川村清志（ゲストスピーカー）「民俗芸能への参入と習得（1）—兵庫県明石市大蔵谷獅子舞の事例から」

歌と語りの言葉と”ふし”の研究  
—日本伝統音楽研究の視点と方法

（継続）

研究代表者：藤田隆則

< 共同研究員 > 上野正章（本学非常勤講師、センター特別研究員）、内田順子（国立歴史民俗博物館助教）、遠藤徹（東京学芸大学准教授）、奥中康人（大阪大学大学院招聘研究員）、小塩さとみ（宮城教育大学准教授）、金城厚（沖縄県立芸術大学教授）、久保田敏子、後藤静夫、薦田治子（武蔵野音楽大学教授）、近藤静乃、島添貴美子（富山大学講師）、Silvain Guignard（大阪学院大学教授）、田井竜一、竹内有一、細川周平（国際日本文化研究センター教授）、山田智恵子

日本の伝統音楽の諸種目の多くが、歌詞をもった音楽（いわば声楽）であるが、声楽の研究にはあまり焦点が当てられない。この背後には、学問の制度上の問題がある。歌詞の研究者（主に国文学）は、歌詞の内容解釈を優先させるため、形式の研究は当然後回しになろう。一方、音楽の研究者（音楽学）も、音楽を自立したシステムとして解釈する営みを中心に置こうとすると、言葉のない音楽を中心にせざるをえない。「音楽」という語が伝統的に器楽をさしてきたことも背景にあらう。

言葉に「ふし」が生成するメカニズムの研究の大切さが学問上で認識されていないわけではない。今から30年さかのぼ

る1970年代まで、言葉と歌 (speech and song) の境界をめぐる問いは、一般音楽学でも主流の問いのひとつだった。また、日本においても数は少ないものの、同じ関心にもとづいた、言葉のアクセント・拍節研究が行われてきた。こうした先達のまなざしや試みにふれつつ、一般音楽学の問いに立ち戻ることには、日本伝統音楽研究の固有の対象が何かを見定め続けるためにも意味があるだろう。

\* 第1回研究会

日時：2008年5月10日(土) 12-16時  
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター(新研究棟7階合同研究室)

内容：近藤静乃「声明の旋律構造—古楽譜の解説・五線譜化をめぐる」

\* 第2回研究会

日時：2008年7月10日(土) 12-16時  
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター(新研究棟7階合同研究室)

内容：小塩さとみ「長唄の「ふし」を考える」、Silvain Guignard「新作は伝統の発展になるか？」

\* 第3回研究会

日時：2008年12月20日(土) 12-17時  
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター(新研究棟7階合同研究室)

内容：中山一郎(ゲスト、大阪芸術大学)「日本語を歌・唄・謡う」、島添貴美子(富山大学)「コメント／ディスカッション」、坂井康子(ゲスト、甲南

女子大学)「狂言の音声表現の音響的特徴について」

\* 第4回研究会

日時：2009年2月6日(金) 12-16時  
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター(新研究棟7階合同研究室)

内容：藤田隆則「幸若舞の伝承と復元—主として音曲の構造に注目して」、沖本幸子(ゲスト、青山学院大学)「白拍子から曲舞・幸若舞へ—拍子舞の系譜」、小林健二(ゲスト、国文学研究資料館)「幸若舞曲の文芸世界」、家塚智子(ゲスト、本学非常勤講師)「曲舞から「幸若舞」へ」

\* 第5回研究会(二日連続開催)

日時：2009年3月26日(木) 13-17時／  
27日(金) 13-17時  
場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター(新研究棟7階合同研究室)

内容：全員「出版計画の確定と執筆原稿検討」

〈共同研究〉

### 地歌作品研究

～初出本と現行との詞章異同を中心に～

(新規)

研究代表者：久保田敏子

〈共同研究員〉 井口はる菜（滋賀大学非常勤講師）、伊藤志野（京都當道会所属演奏家）、笠原洋子（當道音楽会所属演奏家）、野川美穂子（東京芸術大学非常勤講師）、横山佳世子（鳴門教育大学非常勤講師、当センター平成18・19年度非常勤講師）

本研究は、古典地歌の伝承そのものが危機的な状況にある中、少しでもその継承に寄与するために、伝承の現状を把握することを第一の目的とした。

まずは、地歌等曲の数ある古典作品の中で、三味線組歌を除く地歌に焦点を当てて、どんな古典曲が現行しているか、また、廃絶が危惧される曲であるかを調査した。それは、古老の実演家への聞き取り調査に加え、過去に販売されたSP、EP、LPレコード、CD、放送された音源、録音記録、さらには出版されている楽譜および実演家が備忘録として記録している手書き楽譜に至るまで、可能な限りのデータを収集して検討した。

次いで、それらの古典地歌の歌詞が、いつ出版された歌本に初出しているかを過去の調査も踏まえて再検証した。

第三には、聞き取りの際に実演家から受けた質問である「芸系による歌詞の微

妙な異同」についても検証した。これに関してでは、先ず基本となる歌詞の選定を何に拠るかを検討した結果、文政元＝1818年版の『歌曲時習考』を底本に採択した。

『歌曲時習考』は、文政元年版以前の文化2＝1805年に初版が出版され、約470曲を収載している。その直後にも、多少の改訂を加えた後刷りも出されている。しかし、文政元年版に至って、曲数が一挙に増補されて、地歌だけでも600曲近くを収載しているうえに、流布率も高い。しかも、この文政元年版は勉誠社刊の『日本歌謡研究資料集』第九卷（昭和55年）にも全頁が影印で掲載されていて、衆目に触れる機会が多いことも、底本に選んだ理由である。

ただし、現行の地歌曲のほとんどが、この底本に含まれてはいるものの、本書の編纂以降の19世紀に作曲された、例えば松浦檢校の晩年の作品や、京物として最もポピュラーな石川勾当、菊岡檢校、光崎檢校といった作曲家の作品や、明治期の作品が、当然ながら一切含まれていないという問題がある。

しかし、これらについてはこれからの課題として、本研究では、先ず文政元年版『歌曲時習考』所収作品のうち、実際に現行の確認できた地歌作品240曲をピックアップし、底本に記されている作詞・作曲者・曲種・調弦・歌詞等を翻刻した上で、歌詞を現在通用の表記に改めた。その上で、現行する各派の歌詞との異同を検証した。異同の検証に際しては、可能な限りの音源と楽譜を参照すると共に、

各派の実演者にも協力を仰ぎ、確認した。

なお、この成果の一部は、本年3月末に、当センターの日本伝統音楽資料集成7として『文政元年版『歌曲時習考』収載の現行曲研究～詞章翻刻と現行の異同検証～』のタイトルで出版している。

### ヤタイの祭りと囃子

(継続)

研究代表者：田井竜一  
(センター准教授・民族音楽学)

<共同研究員> 安達啓子(日本女子大学教授・日本美術史)、網干毅(関西学院大学教授・音楽学)、入江宣子(仁愛女子短期大学非常勤講師・民俗音楽学)、岩井正浩(神戸大学教授・音楽学)、植木行宣(元京都学園大学教授・日本芸能文化史)、垣東敏博(福井県立若狭歴史民俗資料館学芸員・民俗学)、後藤静夫(センター教授・芸能史)、土居郁雄(国立文楽劇場・芸能史)、東條寛(四日市市立図書館副館長・民俗学)、永原恵三(お茶の水女子大学教授・音楽学)、西岡陽子(大阪芸術大学教授・民俗学)、八反裕太郎(颯川美術館研究員・日本美術史)、樋口昭(埼玉大学名誉教授・日本音楽史)、福原敏男(日本女子大学教授・歴史民俗学)、増田雄(歴史学)、米田実(甲賀市役所市史編纂係・民俗学)

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターで実施された、共同研究「山車囃子の諸相」(2000年度)・「ダシの祭りと

囃子の諸相」(2001 - 2002年度)・「祇園囃子の源流に関する研究」(2004 - 2006年度)を継承する形で、全国に分布するヤタイの祭りと囃子に焦点をあてて設定されたのが、本共同研究である。「芸屋台」・「囃子屋台」・「ダンジリと太鼓屋台」を大きな柱として、ヤタイの祭りと囃子の諸相について、様々な角度からの考察・議論をおこなっている。

今年度を実施した共同研究会は、以下の通りである(開催場所は特記しない限り、いずれも京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1ないしは2)。

#### \* 第1回研究会

2008年6月14日(土)、テーマ「香川のダンジリと獅子舞」、(1)今年度の共同研究会の予定と日程の説明、(2)高嶋賢二氏(伊方町立町見郷土館学芸員、ゲストスピーカー)「香川のダンジリと獅子舞」、(3)総合討論

#### \* 第2回研究会

2008年9月20日(土)、テーマ：「徳島のダンジリ・太鼓屋台の祭りと囃子」、(1)高橋晋一氏(徳島大学総合文化学部教授、ゲストスピーカー)「徳島県の祭礼山車と囃子」、(2)総合討論

#### \* 第3回研究会

2008年11月29日(土)、テーマ：「丹波の曳き山・囃子屋台と囃子 兵庫編」、(1)西岡陽子「兵庫県丹波地方の曳山と屋台概観」、(2)田井竜一「波々伯部神社祭礼と川原住吉神社祭礼の囃子」、(3)総合討論

#### \* 第4回研究会



2008年12月20日(土)、テーマ:「丹波の曳き山・囃子屋台と囃子 京都編」、(1) 田井竜一「園部の丹波祭囃子・質美の屋台囃子・口八田の屋台囃子の諸相」、(2) 総合討論

\* 第5回研究会

2009年1月24日(土)、テーマ:「丹後の屋台囃子の諸相」、(1)「京都祇園祭の山鉦行事」の試写、(2) 樋口昭「丹後の屋台囃子の諸相」、(3) 総合討論

胡弓の源流と受容  
一東西交渉の視点を中心に一

(新規)

研究代表者: 竹内有一  
<共同研究員> 泉万里(日本美術史)、上野暁子(大阪大学大学院博士後期課程)、加納マリ(武蔵野音楽大学講師)、蒲生郷昭(東京文化財研究所名誉研究員)、神戸愉樹美(国立音楽大学講師)、久保田敏子、後藤静夫、田中悠美子(兵庫教育大学大学院准教授)、寺内直子(神戸大学大学院教授)、皆川達夫(立教大学名誉教授)、エンゲルベルト・ヨリッセン(京都大学大学院教授)

日本唯一の擦弦楽器として江戸時代から親しまれている胡弓。三味線に比べるとはるかに耳にする機会が少なくなったが、現在でもいくつかの分野で重宝され



ている。その源流については、中国・琉球の楽器との関係、西洋楽器ないし「ラヘイカ」なるものとの関係、三味線との関係を軸に語られてきたが、歴史的な確証が得られていることは多くない。

この共同研究は、2007年「環太平洋ガンバ大会 in Hawaii」での加納・神戸による共同研究を契機とし、『糸竹初心集』など17世紀の書物にみられる言説はもとより、キリシタン文書や絵画資料を手がかりに胡弓の源流について再検討し、これまでの通説や研究状況を整理しながら、16世紀から元禄期頃までの胡弓に関する歴史的研究の新しい展望を開く試みである。

研究期間は単年度。主として下記のような研究活動を行い、公開講座において成果の一部をプレゼン発表した。電子メールによる研究ミーティングも頻繁に行ったが、その委細は省略する。研究成果に関わる論文・研究ノート・資料・年表等は、センターの紀要およびwebサイトにおいて、2009年度より順次公開していく予定である。

**\*第1回：準備部会**

2008年5月26日(月) 10:00-17:00、日本伝統音楽研究センター資料室・閲覧室・805研究室

研究例会開催に向けた資料の検索・閲覧・複写、意見交換、計画立案(上野・加納・神戸・竹内)

**\*第2回：研究例会 その1**

2008年6月22日(日) 12:00-18:00、日本伝統音楽研究センター合同研究室1

テーマ：共同研究のコンセプトをめぐって (1)研究の趣旨と目的(竹内)、(2)各自の専門分野とこの共同研究との関わりについて(全員)、(3)先行研究に関する情報整理(加納・蒲生・神戸・竹内)、意見交換(全員)

**\*オプション企画1：探訪調査**

2008年6月23日(月) 13:00-16:00、金峯山寺(奈良県吉野郡吉野町吉野山)

テーマ：廻船入港図額(重文、万治4年銘)の熟覧、意見交換

**\*第3回：研究例会 その2**

2008年8月6日(水) 12:00-17:00、日本伝統音楽研究センター合同研究室2

テーマ1：胡弓の源流に関する研究史

「近世隨筆の中の胡弓—大槻文彦が収集・考察した近世の言説と絵画—」(竹内)、テーマ2：胡弓の源流と受容を辿る (1)胡弓関連の年表についての補足説明と訂正版について(加納)、(2)貞享以前「こきゅう」の追加文字資料(蒲生)、テーマ3：キリシタン史料をめぐって「『音楽の宇宙』の神戸稿を読み解く—胡弓との関連は如何に—」(神戸)、意見交換(全員)

**\*第4回：研究例会 その3**

2008年9月21日(日) 12:00-17:00、

2008年9月22日(月) 10:30-16:00、日本伝統音楽研究センター合同研究室1

テーマ1：絵画史料の再検討 (1)元禄期以前の胡弓描画—追加分一、(2)初期洋風画に擦弦楽器が描かれた背景(泉、加納、蒲生、神戸)、テーマ2：楽器学的考察の可能性(中溝一恵：ゲストスピーカー・国立音楽大学専任講

師)、テーマ3: 講演「洋楽渡来考」(皆川)、テーマ4: 民俗芸能への視座「派生的展開—越中おわら節、伊勢音頭—」(後藤、竹内)、テーマ5: 近世初期におけるキリシタンの盲人音楽家調査に向けた課題(上野)、テーマ6: 胡弓の歴史的奏法の画証的・実践的考察—ヴィオラ・ダ・ガンバを交えた試演—(加納、神戸、田中)、意見交換(全員)

\* オブション企画2: 勉強会

2008年11月24日(月・祝) 13:00-15:00、国立西洋美術館講堂(東京都台東区)

テーマ: 16世紀イタリア美術史から見る「洋人奏楽図屏風」—擦弦楽器をめぐって—(神戸)、講演「対抗宗教改革期の図像がもつメッセージ性をキリシタン図像の南蛮屏風に読み取る試み—キリスト教図像と音楽の関わり—」(高梨光正: ゲストスピーカー: 国立西洋美術館学芸課主任研究員)

\* 第5回: 研究例会 その4

(2008年度第3回公開講座と共催。内容詳細はセンターニュース参照)

2009年1月12日 14:00-17:00、日本伝統音楽研究センター合同研究室1

テーマ: 胡弓の謎を探る—その源流と魅力—、研究成果の一部のプレゼンテーション(泉、加納、神戸、竹内)、意見交換(全員)

(2007年度補遺、プロジェクト研究)

日本近代における音楽・芸能の再検討

(継続)

研究代表者: 後藤静夫

\* 第9回研究会

2008・03・01(土)(於 大阪大学美学棟日本学B教室)

発表: 上田学「初期映画興行の志向性」、検討: プロジェクト研究報告書について

## 非常勤講師の研究報告

平成20(2008)年度

家塚 智子

### 「中世武家儀礼と芸能」

今年度は、第4回公開講座「幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉—」の研究報告にむけて、現在伝承されている幸若舞の調査とともに、日本中世史、芸能史、中世文学など各分野における曲舞、幸若舞(幸若舞曲)に関する研究史の整理を行い、武家社会だけではなく、公家社会、一般民衆層への享受の様相を、文献史学の立場から検討した。そのうえで、中世芸能史における位置づけを試みた。

幸若舞は、現在福岡県みやま市瀬高町大江の幸若舞保存会によって伝承され、国の重要無形民俗文化財に指定されている。毎年1月20日、大江天満神社内の幸若舞堂において、上演、奉納されている。2009年1月20日、福岡県みやま市瀬高町大江に赴き、見学、調査させていただく機会を得た。当日は、地元の小学生による「浜出」「日本記」、青年による「和泉ヶ城」、成人による「安宅」「高館」「敦盛」の合計5番が奉納された。特に、2008年1月、内外からも復曲の声が高かった「敦盛」が復曲上演されたことにより、注目を集めた。当日は、歴代の家元をはじめ、演者たちにインタビューをすることもできた。芸を伝承していくことのご苦労や、工夫されていること、新たな挑

戦として復曲に対する意気込みなどを伺うことができ、貴重な機会であった。

さて、幸若舞は、越前の幸若大夫によって担われた曲舞という芸能のひとつである。当初、曲舞は「道の曲舞」と呼ばれるように、国家が保護する専門の芸能者によって担われていた。ところが、山路興造氏の研究によると、南北朝期の動乱を経て、古代権力が衰退し、国家が保護する「道々の輩」の活動基盤が喪失し、「道々の輩」たちは衰退してしまう。曲舞も例外ではなく、世阿弥が著した『五音』によると、これが書かれた15世紀初頭には、奈良の賀歌の家だけが残り、祇園祭の曲舞車に残るとある。

曲舞という担い手を失った芸能を、今度は各地の声聞師・舞々たちが新たに引き継ぐことになり、一世を風靡した。

もっとも声聞師以外にも手傀儡が担っていたことは伏見宮貞成親王の日記『看聞日記』応永23年(1416)3月25日条から確認することができる。手傀儡が、猿楽や立鼓、獅子舞とともに、曲舞を舞ったということが記載されており、曲舞の担い手が定まる過渡期の史料ともいえよう。

中原康富の日記『康富記』応永30年(1423)10月1日条には、近江・河内・など各地の声聞師たちが上洛し、京中で連日興行を行っていたことが記されている。京都の声聞師では、柳原散所の小犬が曲舞を舞った例が早い(『看聞日記』永

享10(1438)年2月16日条)が、北畠・桜町・大黒をはじめ、京都の声聞師が積極的に曲舞に関わるのは、応仁・文明の乱後のことである。

このように各地の声聞師たちが、京都で芸を競っているなか、頭角を現したのが、越前田中の幸若大夫による曲舞、のちの幸若舞であった。『信長公記』でも有名であるように、織田信長は幸若舞を好んだといわれている。天正2(1574)年幸若大夫に対して、村内に百石の領地を与えている。以来、知行の安堵が行われた。そして、徳川家康は武家の式楽とする。

大江に伝わる『大頭舞之系図』によると、大江の幸若舞は、大頭流と称される京都で興った一流派で、大頭の者たちが筑後の山下城主に招かれ、家臣たちに舞を教えたとある。

ただし、各地に舞々がいたこと、そしてその舞々たちが、戦国大名を檀那とし、民間陰陽師として占いや祈禱などを行い活動していたことを考えると、大江の幸若舞も、筑後近辺にいた舞々の系譜を引く可能性も指摘しておきたい。このことについては、さらに史料を蓄積して、今後の課題としたい。

また、2008年10月12日、同じく中世芸能の流れをくむといわれている題目立(奈良市上深川町八柱神社)の見学も行った。国の重要無形民俗文化財に指定されている。かぞえて17歳の少年が宮座に入るための通過儀礼である。当日は「巖島」が奉納された。

#### ◇関連する口頭発表

- \* 2008年10月15日 曲舞から「幸若舞」へ、(財)世界人権問題研究センター研究第2部前近代班研究会、於(財)世界人権問題研究センター
- \* 2009年1月9日 曲舞から「幸若舞」へ、藝能史研究会1月例会、於キャンパスプラザ京都
- \* 2009年2月7日 曲舞から「幸若舞」へ、京都市立芸術大学2008年度第4回公開講座「幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉—」、於ウィングス京都 イベントホール



#### ◇関連する執筆

- \* 「曲舞から幸若舞へ」『グローブ』No.55 (財)世界人権問題研究センター 2008年秋)
- \* エッセイ「幸若大夫登場以前の京都の芸能の場」、講演レジュメ「曲舞から「幸若舞」へ」(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター2008年度第4回公開講座「幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉—」レジュメ冊子、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2009年2月)

今田 健太郎

## 「映画説明における物語の器楽的演出と その由来について」

芸能のひとつの核として「物語ること」がある。それこそが日本のあらゆる音楽や音楽的演出を生み出しているのではないか？ 物語る行為がそのまま音楽として認められている謡や浄瑠璃などは当然のこととして、歌詞を含まない器楽のみによる「囃子」という演出でさえも、「物語ること」と関わりをもちながら、現在においてさまざまなかたちで伏流しているのではないだろうか？

このような射程をふまえて、私は日本におけるサイレント映画の語りと伴奏音楽をとりあげて、歌舞伎の陰囃子との比較によって、その実態と演出の法則を明らかにしようとしている。

サイレント映画の伴奏音楽でさらに興味深いのは、その隆盛期と西洋音楽の流入と普及の時期がほぼ重なっている点である。西洋楽器を用いたり西洋風の旋律を取り入れたりといったキワモノ的かつ表面的な導入にとどまらず、伝統芸能における音楽的演出と西洋音楽のもつ語法が根深く接合されているのである。

たとえば、登場人物の催した哀憫の情をあらわす短調の旋律が、関係者から「悲曲」と呼ばれ、一定の効果をえられるものとして定着している。歌舞伎の陰囃子は、長調／短調といった調性をもたないし、また登場人物の感情を音の種類によってあらわすこともない。つまり悲曲は、

西洋音楽に固有の語法にのっとっている。しかしながらこれは、登場人物が心情を切々と訴える、いわゆる「くどき」的なせりふや語りにつきしたがって静かに演奏される場合が多い。「くどき」というまでもなく伝統芸能によくみられる音楽的演出だが、そこで用いられる三味線ではなく、西洋音楽の旋律と調性によって同様の効果が達成されているのである。

このようにサイレント映画の伴奏音楽は、物語ることの伝統的な音楽演出と西洋音楽の語法が流れ込む地点に位置づけられるだろう。この地点の詳細を明らかにすることによって、物語ることの音楽的演出についてこれまで受け継がれてきた蓄積と、それが映画やテレビなどにおいてどのように伏流することになったのかを見通すことができるようになるはずである。

ところで、サイレント映画の語りと伴奏音楽が録音されたものとして、「映画説明」と呼ばれるSPレコードのジャンルが存在する。上映の実際をどの程度反映しているのか未知数であるため、資料としてこれまで顧みてこなかった。しかし、当センターにおいてこれについて講じる機会をもったため、まとまった数のレコードをあらためて聞き直したところ、興味深い点を見いだした。録音の解像度（同時に鳴るさまざまな音が聞き分けられる程度のこと）とサイレント映画の音楽的演出の関係である。

SPレコードにおける録音の解像度は、大ざっぱに言って、アコースティック録音（1900年代から1920年代なかばまで）

と、電気録音（1920年代後半以降）とで大きく異なる。映画説明レコードは、両時期を通じてつくられているが、その録音方式によって、実現できる音楽的演出に明らかな違いがあるのである。

アコースティック録音、たとえば染井三郎の《アントニーとクレオパトラ》のレコード（ニッポノホン90）の場合、弁士の語りの前後に、トランペットによる軍艦行進曲が演奏される。軍艦行進曲が映画館内外で演奏されるのは、実際にも同様だったろうと、傍証から類推される。ただし録音では、語りと音楽は重ねられることはなく、演奏／語り／演奏というふうに時間的に隔てられて構成されている。これはおそらく録音のために簡素化された演出だろう。というのも、アコースティック録音はひとつの吹き込み口をおして集音するため、語りと音楽を同時に録音／再生すると、双方の音が打ち消しあった音のかたまりとなってしまう、ひとつひとつの音を分離させることが難しい。語りと音楽を重ねていないのは、おそらくこうした問題への配慮と思われるからである。

電気録音になると、複数のマイクによる集音とそれらのミキシングによって、語りと音楽のバランスを整えながら録音することができる。たとえば、伍東宏郎の《清水次郎長》のレコード（オリエン 3039A-3040B）は、録音方式が明らかでなく、アコースティック録音である可能性が高いレコードとはいえ、録音の解像度は電気録音の水準をもっており、音楽的演出も電気録音でのそれを先取りし

ている。剣劇の場面など音楽に焦点が当たった場面には、軍艦行進曲と同じく語りとの音を重ねていないが、くどきの場面には語りに三味線の音を重ねるなど、複数の音を同時におさめている箇所も多く含まれているのである。録音の解像度をふまえたうえで、実際の音楽的演出により近づけていると類推できよう。

レコードというものは原理的に、複製・編集の産物である。とりわけSPレコードは、これまで述べたような録音・再生の特性や、片面で3～4分しか収録できないという時間的制約をもっており、録音にさいして芸態を調整・改変せざるをえず、実際の芸能とはかけ離れた別物であると、とりあえずは指摘されているだろう。

とはいえ、同時に映画説明という「看板」にふさわしい内容を保持する必要があったことも間違いない。その語り口調、音楽のありよう、そしてそれらの組み合わせを聞けば、現在の人々では思っていたことはできないだろうが、当時の人々ならばすぐにサイレント映画の語りと伴奏音楽（をもとにしたもの）であると理解できるくらいの内容は保持されていたはずである。このように考えれば、映画説明レコードは、音楽的演出を含んだ資料として再評価できるのではないだろうか。

#### ◇関連する研究発表

\* 2008.12.6 「近代における陰囃子の楽士たち」（日文研シンポジウム「戦間期大阪の音楽と近代」）国際日本文化研究センター

- \* 2009.1.7～ 企画展示「活動写真館の起源をめぐって」日本伝統音楽研究センター
- \* 2009.1.31 「映像メディアに内包された音響的知」(日本マスコミュニケーション学会 メディア史研究部会「映像メディアにおける音分析へのアプローチ」) 東京国立近代美術館フィルムセンター
- \* 2009.2.5 伝音セミナー「映画説明レコードとはなにか?」日本伝統音楽研究センター

◇関連する演奏活動

- \* 2008.10.8 「第6回京都映画祭(祇園会館)」にて、サイレント映画の伴奏楽団のバンドマスター兼バイオリン奏者として、《実録忠臣蔵》の上映に参加
- \* 2009.3.4 「神楽坂伝統芸能2009(毘沙門天善国寺書院)」にて、サイレント映画の伴奏楽団のバンドマスター兼バイオリン奏者として、《血煙高田馬場》の上映に参加

上野 正章

「両大戦間の日本の地方都市における音楽文化の研究」

平成18年度から継続して、明治期から昭和前期の日本の地方都市における西洋音楽の普及のメカニズムを研究している。主に北陸地域と山陰地域を調査してきたのだが、両大戦間の大阪における音楽文化について発表する機会を得たので、研究計画をいくらか変更し、大阪において西洋芸術音楽が普及する過程を解明することを試みた。

最初に行ったのは、大阪の該当期間における音楽文化の状況の把握である。大阪毎日新聞、大阪朝日新聞、大正日日新聞及び音楽関連雑誌を調査した結果、大正中期ごろから急に西洋音楽に対する関心が高まり、演奏会に詰め掛ける人々の数が爆発的に増加するということが突き止められた。例えば、大正12年の東京音楽学校による公演は、昼夜二回公演で10000人の人数を集めたと報じられるほどである。もちろん、これを可能にしたのが巨大な多目的ホールである大阪中央公会堂の完成(大正11年)であることは言うまでもない。しかしながら、環境を整えても人々が自動的に集まるとは限らないこともまた事実である。そこで、再度、当時の音楽文化の状況を振り返って検討すると、演奏会についての新聞報道も時を同じくして活発になっているということが明らかになった。中には、単なる演奏会情報の提供を越えて、西洋音楽の教

育・普及的な意味合いを持つものも多数散見されるほどである。

これらの新聞報道は大阪における西洋芸術音楽の普及を推進させるために重要な役割を果たしたのではないだろうか。もちろん、後援団体や蓄音機などの要因の検討も必要だが、ラジオの無い時代、新聞による集約的な音楽報道は、新聞読者に現在よりもはるかに強い影響を与えたとはいえない。

言説による普及のメカニズムの解明に関してはまだまだ至らない点が多いが、大阪における西洋芸術音楽の普及は大正後期頃からはじまることが特定できたことは大きな収穫であった。というのも、例えば松江の場合は大正末から昭和5年頃に活発な普及活動が行われており、地域によって普及の時期が異なることが確認できたからである。地方都市の状況のデータを積み重ねることによって、さらに新たな展望が生まれるだろう。

なお、本年度は当センターの公開講座を担当させていただいた。テーマは「一都市における西洋音楽の受容——松江市昭和2年秋の例を中心に」である。二部構成とし、



第1部は昭和2年秋に開かれた藤原義江のリサイタルを中心に組み立てて、大正末から昭和初期の松江市においてどのように西洋芸術音楽が普及したのかと

いうことを紹介し、第2部では大西氏のご協力を得てその頃のレコード文化の状況を紹介した。また、配布資料において、講座

では十分に議論し切れなかった明治期末の松江市の音楽文化の様相について詳述した。どのように西洋音楽が浸透していったのかという状況の紹介であり、日本伝統音楽が楽しまれている松江市にまず学校の唱歌教育から西洋音楽が入り込み、日露戦争における楽隊活動によって器楽が導入され、蓄音機や演奏会によって西洋芸術音楽の普及が促進されていくという過程を紹介したのである。

それから本年度も展示コーナーを担当する機会を得たので、音楽を取り扱った日本の郷土出版物を陳列した。また、田邊氏寄贈コレクションに含まれる『音楽文化新聞』を調査し、当センター所蔵全全ての索引を作成した。



寺田(大谷) 真由美  
「三味線小歌曲と他の音楽・芸能との  
関連性」

三味線小歌曲(端唄、小唄、うた沢、俗曲の総称とする)は、劇場音楽など都市部で発展した三味線音楽(中央)と、民俗音楽(地方)とが混じり合う境界部分に位置し、両者の音楽的影響を受けつつ展開してきた。従来の三味線音楽の研究は、劇場音楽など中央の音楽が中心であり、三味線小歌曲は、文学や芸能史方面からの研究がいくつか行われているが、音楽そのものに関する研究は少ない。しかし、三味線小歌曲の展開を鑑みると、その音楽的研究は他の音楽や芸能との関連性の中で論じる必要があると考えられる。三味線小歌曲と他の音楽、芸能との音楽的関連性について考えるにあたり、三味線小歌曲受容の場の一つであり、とりわけ端唄、俗曲の発展と深い関わりを持つ寄席の音曲の芸について注目した。

落語(噺)の合間に、音曲や手品、紙切り、太神楽などの諸芸(この諸芸を色物という)を織り交ぜた寄席は色物席と呼ばれる。それらの色物は決して落語の添え物などではなく、それぞれに洗練され、確立された芸である。かつての色物は現在よりもはるかに種類も多く、芸人の層も厚かったことが当時の見立番付やピラなどの資料からわかる。当然音曲の芸を演じる芸人も現在とは比較にならないほど多く、またSPレコードの録音からはその技量もかなり高度なものであった

ことがうかがえる。

そのなかでも「稀代の天才」とうたわれた女性芸人立花家橘之助(1868-1935)の芸を中心として、明治期~昭和初期における寄席の音曲の芸と他の音曲との関連性について考察を試みた。それを明らかにするために、まず橘之助の音源(SPレコード)の収集および検討を行った。レコードコレクター岡田則夫の研究から、橘之助のSPレコードは現在約85枚存在することがわかっている。この枚数は他の音曲の芸の芸人と比較しても群を抜いており、寄席の大看板であった橘之助のSPレコードがいかに人々に歓迎されたかの証左であろう。しかし、管見の限りではそれらがまとまって公的機関、研究機関等に保存されている例はなく、ごくわずかのコレクターが長年かけて収集しているにすぎない。そのため私個人で収集した音源に加え、大西秀紀(立命館大学文学部非常勤講師)、塚田博(邦楽研究家)両氏の御協力を得て、橘之助の代表曲《たぬき》、《ほこりたたき》を含む30曲余りを収集することができた。

《たぬき》は橘之助の中で最も人気の高かった曲で、いくつもの会社がSPレコードの吹き込み、販売を行っている。レコード会社によって多少吹き込み部分が異なるものの、演奏時間が約10分~14分かかるといふ寄席の音曲としてはかなりの大曲である。これは「文福茶釜」の逸話を歌詞とし、長唄の《たぬき》を元に橘之助が工夫を重ね、清元や当時の流行り唄などのさまざまな音楽的要素を取り込んで練り上げた曲であり、長唄《たぬき》

とはかなり趣の異なるものとなっている。そして、中間部には三味線の曲芸的ともいえる合方が挿入されており、ここで橋之助の三味線の腕を存分にアピールしている。

もう一つの人気曲であった《ほこりたたき》とは、浄瑠璃から端唄、小唄、流行り唄まであらゆる曲をメドレーとしたものの総称であり、橋之助以外にも当時の寄席では演じていた芸人も何人か存在していたようである。こちらも《たぬき》同様数社からSPレコードが販売されており、会社によって多少吹き込み内容が異なるものの6分を超える曲である。橋之助の《ほこりたたき》では清元、小唄、新内、義太夫、俗曲（当時の流行曲を含む）、端唄が、ほとんど曲の継ぎ目がわからないほど連なっているにも関わらず、それぞれの種目が持つ特色一つまり、清元らしさ、小唄らしさ、義太夫らしさ……は生きている。むしろ、メドレーとすることでその種目ごとの特色が際立つように橋之助が演じているようでもある。

上記の二曲の他、橋之助の音源および同時代に活躍した他の音曲の芸の芸人の音源や資料を検討した結果、明治期～昭和初期の寄席の音曲の芸の特質について二点指摘することができた。一点目は、現在ではほとんど耳にすることのなくなった他の音曲とのコラージュ型の俗曲が存在し、人気を博していたことである。このようなコラージュは橋之助のような天才的才覚を持つ芸人の手によって作ら

れ、演じられていたもので、ひとえに芸人の資質に依拠するといってもよい。さらに《ほこりたたき》に代表される多種目のメドレーは、受容者である観客や聞き手に種目ごとの差異や特徴が共有されていない場合、その面白さやメドレーの鮮やかさが通用せず、したがって芸として成り立ち得ないことも同時に指摘したい。二点目は、長く重みのある曲も寄席の音曲として演じられていたことである。現在では都々逸や端唄などの短く洒脱な曲を数曲演じ、合間に話を挿入する形の高座が多い。もちろん当時の演目にもこのような曲は当然ながら見られたが、前述した《たぬき》の他にも《大津絵》、《とちりとん》といった長く重みのある俗曲も受け入れられていたことがうかがえた。

これらの点は芸人側の芸の資質に依存しているだけではなく、受容側の芸への理解とも密接につながった特質である。明治期～昭和初期の寄席の音曲の芸と他の音楽との関係性をみることで、とかく一義的な見方をされがちな俗曲の多様性の再考につなげたい。

#### ◇関連する研究発表

- \* 2009.1 企画展示「寄席高座の音曲芸」  
日本伝統音楽研究センター展示スペース
- \* 2009.1.8 伝音セミナー「寄席の音曲芸を聴く―立花家橋之助を中心に」  
日本伝統音楽研究センター

## 専任教員の活動報告

平成20(2008)年度

(平成19年度補遺を含む)

久保田 敏子

### ◆著作活動

#### ◇解説・楽曲論

- \* 2008.01～2009.03 隔月「長等の春」  
「七小町」「玉川」「玉の台」「新高砂」  
「五段砧」の眺」「宇治巡り」、『創明』  
創明音楽会刊
- \* 2008.02～2009.02 隔月「松の寿」  
「銀世界」「稚児桜」「墨絵の芦」「舟の  
夢」「紅葉尽」「椿づくし」、『楽報』都  
山流尺八楽会刊
- \* 2008.03.22 「天下太平」「四季の友」  
「明石」「雲井曲」「心尽」「玉鬘」「若  
菜」『箏曲組歌演奏会～流派を越えて  
組歌の魅力を探る～』現代邦楽研究所  
主催プログラム、紀尾井小ホール
- \* 2008.06.21 「さらし風手事」「琉球民  
謡による組曲」「新青柳」「交声曲  
＜松＞」、『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ  
～さすらう心～』大阪新音主催プログ  
ラム、いずみホール
- \* 2008.09.21 「八重衣」「夕霧文章」「ゆ  
き」、『菊原光治地歌の世界』プログ  
ラム、松竹座
- \* 2008.10.25 「さらし」「鐘が岬」「桜狩」、  
文化庁芸術祭参加公演『萩岡松韻の世  
界～関西所演名所を主題として～』プ  
ログラム、文楽劇場小ホール
- \* 2008.10.28 「身替音頭」「桶取」「三国

一」「古松風」、『富成清女地歌箏曲演  
奏会』プログラム、紀尾井小ホール

- \* 2008.11 平家「祇園精舎」「乙の曲」  
「鑑の曲」「蟬の曲」、名古屋派「五段  
砧」「浮舟」「初音」、文化庁芸術祭  
参加CDアルバム『検校三品正保の藝  
術』DOOEM 05808, S-Tow Corporation
- \* 2008.11.01 「手事」「吾妻獅子」「秋の  
調」「凍る～箏のために～」、文化庁芸  
術祭参加『片岡リサ箏・三弦リサイタル  
～音と歌で綴る300年の彩り』プロ  
グラム、HAKUJIU HALL
- \* 2008.11.02 「六段の調」「水煙風鐸」  
「落葉の躡」「越天楽変奏曲」「尾上の  
松」「大和の春」、桐絃社シリーズ演奏  
会～桐絃社創立60周年記念～プログ  
ラム、いずみホール
- \* 2008.11.04 「稚児桜」「四段砧」「吉野  
静」「尾上の松」、芸術祭参加『菊武厚  
詞リサイタル』プログラム、文楽劇場  
小ホール
- \* 2008.08.30 「夕顔」「新浮舟」「梓」、『横  
山佳世子リサイタル＜源氏物語～千年  
の時空を越えてvol.1～＞』プログラム、  
京都芸術センター
- \* 2008.12.20 「五段砧」「夜々の星」  
「ながれ」「秋の調」「二つの田園詩」、  
『市橋京子・岡崎年優ジョイントコン  
サート』プログラム、紀尾井小ホール
- \* 2008.12.24 「吾妻獅子」「八重衣」「尾

上の松」、日本伝統文化振興財団邦楽オーディション合格者CD『横山佳世子』、(財)日本伝統文化振興財団、VZCF 1021

- \* 2008.12・24 「残月」「雪」「八重衣」、日本伝統文化振興財団邦楽オーディション合格者CD『黒川真理』、(財)日本伝統文化振興財団、VZCF 1022
- \* 2009.03.14 「須磨」「新青柳」「浮舟～水激る宇治の川辺に～」 「融」、横山佳世子リサイタル<源氏物語～千年の時空を越えて vol.2 ～>』プログラム、京都府民ホールアルティ

◇論文・論考・資料

- \* 2008.03.01 「清元節と清元梅吉」、『邦楽と舞踊』特集記事、邦楽と舞踊出版社刊
- \* 2008.03.30 「2007年<邦楽>分野の動向」、『大阪府文化芸術年鑑 2007年版』、大阪文化団体連合会編
- \* 2008.03.22 「箏組歌について」、『箏曲組歌演奏会～流派を越えて組歌の魅力を探る～』、現代邦楽研究所主催プログラム
- \* 2008.04.01 「地歌・箏曲の先師たち⑨」、『三曲』、日本三曲協会刊
- \* 2008.05.18 「長谷検校と九州系地歌の系譜⑦」『長谷検校記念全国邦楽コンクール』本選プログラム、熊本市市民会館大ホール
- \* 2008.07.13 「日本の伝統的な音楽について～『源氏物語』に登場する音楽と楽器～」、京都アスニー『源氏物語』千年紀シンポジウム資料
- \* 2008.12.13 「当道座と光崎検校」、『愉

かなコンサート』プログラム、NPO法人日本の音進行普及協会(楽音会)主催、石川県文教会館

- \* 2009.03.06 「声明と雅楽～儀礼と宴遊～」、『日本の伝統音楽をたどる(Ⅰ)』資料
- \* 2009.03.22 「箏組歌について」、『箏曲組歌演奏会～流派を越えて組歌の魅力を探る～』、現代邦楽研究所主催プログラム
- \* 2009.03.31 編集・執筆「文政元年版『歌曲時習考』収載の現行曲研究～詞章翻刻と現行の異同検証」、『日本伝統音楽資料集成7』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター刊

◇随想・寄稿

- \* 2008.02.08 「序にかえて」、『樂學軌範訓讀』、和田一久疏、上北野樂堂版
- \* 2008.03.31 編集・「あとがき」、『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽—』、藤田隆則共編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター<研究報告1>
- \* 2008.03.31 「地歌箏曲の史料と研究」、『詞章本の世界—近世のうた本・浄瑠璃本の出版事情—』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター<研究報告2>
- \* 2008.04.12 「記念の演奏会に寄せて」、『阿部桂子十三回忌藤井久仁江三回忌・藤井泰和<銀明会>三代目会長継承披露演奏会』同会プログラム、国立劇場
- \* 2008.09.01 「日本伝統音楽の研究と情報発信」、『藝文京』通巻106号、京都市芸術文化協会刊、p.2

- \* 2008.10.01 「古典で磨く詩心と洒落のセンス」、『楽音会ニュース<リレー・エッセイ>』、NPO 法人日本の音進行普及協会刊
- \* 2008.12.24 「ファーストアルバムに寄せて」、CD『蒼天～山本真山作品集Ⅰ』、(財)日本伝統文化振興財団、VZCG696

◆口述活動

◇講演・口演・解説

- \* 2008.02.01 「今後の高等学校における邦楽教育について」、大阪府教育委員会主催『我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業報告会』、府立教育会館
- \* 2008.10.07 「清元節の伝承とその特色～<明烏花濡衣・神田祭>を例に」、『継ぐこと伝えること～清元節～』、京都芸術センター
- \* 2008.03.09 「地歌箏曲の楽しみⅡ～筆手付の妙味で楽しむ洛中洛外絵巻」企画及び司会・解説、『第4回公開講座』日本伝統音楽研究センター主催(詳細別掲)
- \* 2008.3.27 「御代万歳」「みだれ」「金比羅舟々」「鉄輪」「石橋」、『落ち椿の会』法然院主催、法然院本堂
- \* 2008.4.20 「雲雀の曲」「八千代獅子」「石橋」「千鳥の曲」「春の曲」「四季の眺」「越後獅子」「稚児桜」「みだれ」「八木節スケルツォ」「都踊」「根曳の松」「夜々の星」「萩の露」「飛躍」、当道友楽会主催『箏曲演奏会』大阪メルパルクホール
- \* 2008.6.21 「宮城道雄の偉業と演奏曲目について」、『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ～さすらうこころ～』、いずみホール
- \* 2008.07.05 「打盤・横槌打合せ」「住吉詣」「面影」「芥子の花」「御山獅子」「玉川」「磯千鳥」「桜川」「夜々の星」「みだれ」「西行桜」「磯の春」「桂男」「融」「新浮舟」「月」「残月」、『古典を勉強する会』、琴友会主催、守口文化センター・エナジーホール
- \* 2008.07.13 「平安時代と音楽」パネリスト、シンポジウム『源氏物語千年紀連続企画<若菜の巻>』、京都アスニーホール
- \* 2008.08.31 「楫枕」「夕顔」「夏の曲」「月」「舟の夢」「磯千鳥」「芥子の花」「園の秋」「狹筵」「六段の調」、『地歌箏曲演奏会～祥門会～』、国立文楽劇場
- \* 2008.09.04 「俗謡一端唄・小唄・俗曲などを聴く」、『平成20年度 第4回伝音セミナー』ナビゲーター、伝音センター7階合同研究室1
- \* 2008.11.02 「桐絃社と宮城道雄及び演奏曲目について」、桐絃社シリーズ演奏会～桐絃社創立60周年記念～プログラム、いずみホール
- \* 2008.09 「千代見草」「六段の調」「夕顔」「摘草」「金剛石」「綾衣」「京松風」「黒髪」「菊の寿」「墨絵の芦」「ゆかりの月」「茶音頭」「ゆき」、『菊津木昭胡弓演奏会』、玉水会館ホール
- \* 2008.11.25 「巽八景」「龍虎」、NHK-TV『芸能花舞台』解説収録(2009.01.15 放映、

他再放送あり)

- \* 2008.11.29 「薄衣」「産安」「六段の調」「鹿の遠音」「千鳥の曲」、『心に滲み入る<和の音>』、長岡天満宮
- \* 2008.12.13 「桜川」「秋風の曲」「五段砧」「夕べの雲・菜露打合せ」、『古典三昧～光崎検校の世界～』、NPO 法人日本の音進行普及協会（楽音会）主催、石川県文教会館
- \* 2009.03.06 「声明と雅楽～儀礼と宴遊～」、アスニー・セミナー『シリーズ日本の伝統音楽をたどる（I）』、京都アスニー
- \* 2009.03.27 「三津山」「四つの色」「五段砧」「お乳ゃ乳母」、打合せ「八段の調・六段の調」、『おち椿の会～善気山の春を寿ぐ～』、法然院主催、法然院本堂

#### ◆学内活動

- \* 評議員、国際交流委員会、学术交流推進委員会、将来構想推進委員会、自己点検・評価委員会、全学広報委員会、キャンパス・ハラスメント防止対策委員会、安全衛生委員会、日本学生支援機構奨学金返還免除者候補者選考委員会、創立 130 周年記念事業運営委員会、京都市立芸術大学芸術教育振興協会委員会委員

#### ◆社会活動

##### ◇委員

- \* 文化審議会文化財分科会第四部門専門委員会伝統芸能部会委員、同選定保存技術部会委員長

- \* 京都創生研究会「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）」分科会委員
- \* 京都コンサートホール企画運営委員
- \* 京都の秋音楽祭実行委員
- \* 京都芸術センター運営委員
- \* 大阪府伝統文化教育推進協議会委員
- \* 大阪 21 世紀協会企画運営委員
- \* 奈良秋篠音楽堂伝統芸能企画運営委員
- \* NPO 法人日本の音振興普及協会副理事長
- \* 社団法人日本尺八連盟理事

##### ◇審査・選考委員

- \* 京都府古典芸能振興公演補助金審査委員
- \* 京都市芸術文化特別奨励制度選考委員
- \* 京都市芸術新人賞・功労賞選考委員
- \* 財団法人ポーラ伝統文化振興財団ポーラ賞選考委員
- \* 財団法人日本伝統文化振興財団邦楽技能者オーディション選考委員
- \* 社団法人日本尺八連盟主催オーディション・コンクール審査員
- \* 熊本長谷校校記念全国邦楽コンクール審査員

##### ◇所属学会

- \* 社団法人東洋音楽学会、日本歌謡学会（評議員）、日本演劇学会、日本民俗音楽学会。

後藤 静夫

#### ◆著作活動

- \* 2008・03・31 小論「義太夫節の床本」、『詞章本の世界』（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告 2）、竹内有一編、京都市立芸術大学日本伝

統音楽研究センター、p.32

- \* 2008・06・15 エッセイ「文楽一家元・門閥なしに継承する独自の芸」、『季刊生命誌（2008夏号「続く」）』57、pp.6-7、JT生命誌研究館（web版もあり）
- \* 2008・06・30 考察「文楽・世代交代期を迎えて一新たな方向性の模索」、『伝統芸能の現状調査一次世代への継承・普及のために一』、pp.62-67、日本芸能実演家団体協議会（web版もあり）
- \* 2009・02・11 論文「人形浄瑠璃（文楽）の発展」、服部幸雄監修『日本の伝統芸能講座 舞踊・演劇』、pp.290-322、独立行政法人日本芸術文化振興会国立劇場
- \* 2009・03・31 書籍紹介「鳥越文蔵監修・義太夫節正本刊行会編『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集』全12巻』、『楽劇学』16、pp.10-12
- \* 2009・03・31 報告「地方人形座の活性化—香川県・讃岐源之丞座を例に」『日本伝統音楽研究』第6号、pp.26-35
- ◆プロデュース活動
- \* 2008・10・25 聞き手「人形の役作りとかしら割り—吉田文雀師に聞く」『国文学 10月臨時増刊号・文楽—一人形浄瑠璃への招待』、pp.4-21、学燈社
- \* 2008・07・26～27 企画・監修「伝統演劇・文楽」、三業の実演と解説講義、京都造形芸術大学通信教育部総合教育科目、前期、国立文楽劇場他
- \* 2008・11・16 同上 後期
- \* 2008・11・25 企画協力「芸大で聞く義太夫節」、音楽学部、日本音楽史の授業の一環として、本学日本伝統音楽

研究センター

- \* 2009・04・01 監修「[型]で観る文楽」、『なごみ09年4月号 小特集』、pp.77～85、淡交社
- ◆講演・口述活動
- \* 2008・02・07 解説・進行「義太夫節 さまざま—男と女・芝居と素浄瑠璃」、2007年度第9回伝音セミナー、本学日本伝統音楽研究センター
- \* 2008・11・06 解説・進行「義太夫節—美声？難声？」、2008年第6回伝音セミナー、本学日本伝統音楽研究センター
- \* 2009・02・07 総合司会「幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉」、日本伝統音楽研究センター 2008年度第4回公開講座 ウイングス 京都イベントホール
- ◆講義・講座活動
- \* 2008・05・27 「近松と文楽」、神戸女子大オープンカレッジ「近松再発見」講師、神戸女子大学教育センター
- \* 2008・06・01 「丸本歌舞伎と音楽—義太夫・清元・長唄の世界」、よみうり歌舞伎講座シリーズ③講師、よみうり梅田文化センター
- \* 2008・07・01～03 「伝統人形劇で人形を遣うとは？」、人形劇パベットパーク特別講座講師、東かがわ市とらまる人形劇研究所
- \* 2008・07・30 「文楽の世界を知る①」、ラスタ教養大学講師、伊丹市ラスタホール
- \* 2008・08・27 同上 ②
- \* 2008・08・30 「歌舞伎の音楽」、文楽応援団研修会、国立文楽劇場

- \* 2008・11・28 「文楽の舞台裏一人形と浄瑠璃のしくみ」神戸大学大学院「文化情報リテラシーを駆使する専門家の養成」セミナー第8回 講師、神戸大学国際交流学部
- \* 2008・12・07 「丸本歌舞伎と音楽—義太夫・清元・長唄の世界」、よみうり歌舞伎講座シリーズ追加 講師、よみうり梅田文化センター

## ◆調査・取材活動

- \* 2008・02・15 琵琶湖文化館 日枝山王祭礼図屏風 調査
- \* 2008・02・20 熱田神宮宝物館 熱田宮年中行事絵巻(熱田祭礼図) 調査
- \* 2008・03・14 神戸市立博物館 近世風俗画 調査
- \* 2008・05・01 徳川美術館 津島祭礼図屏風 調査
- \* 2008・05・14 茶道資料館 洛中洛外図屏風 調査
- \* 2008・10・12 奈良市上深川町 題目立 調査
- \* 2009・01・14 大阪城天守閣美術館 洛中洛外図屏風 調査
- \* 2009・01・20 福岡県みやま市 幸若舞 調査等
- \* 2009・02・17 出光美術館 洛中洛外図屏風・祇園祭礼図屏風 調査
- \* 2009・02・26 神宮徴古館 祇園祭絵調査
- \* 2009・02・27 田辺市立美術館 洛中洛外図屏風 調査他

## ◆学内活動

- \* 評議員
- \* 芸術教育振興協会評議員 他

## ◆対外活動

- \* 京都大学地球環境学堂三才学林運営懇話会委員
- \* 大阪府立東住吉高等学校校協議会委員他

## 田井 竜一

## ◆著作活動

- \* 2008.12.10 編著書：田井竜一編『祇園囃子の源流に関する研究』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 研究報告3、京都、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、144pp.
- \* 2008.12.10 論文「祇園囃子の源流」、田井竜一編『祇園囃子の源流に関する研究』、京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 研究報告3、京都、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、pp.1-66
- \* 2008.03.31 論考「第1章 総論 3 丹波地方における祭礼囃子の交流」、兵庫県教育委員会編『丹波の曳山祭礼—波々伯部神社と川原神社をめぐって—』、平成19年度文化庁ふるさと文化再興事業伝統文化総合支援研究委嘱事業実施報告書、兵庫、兵庫県教育委員会、pp.34-36
- \* 2008.03.31 調査報告「京都祇園祭り 放下鉾の囃子」、『日本伝統音楽研究』第5号、pp.101-140



- \* 2008.03.31 調査報告「第2章 波々伯部神社 3 オヤマ (2) 芸能・音楽」、第2章 波々伯部神社 4 ヤマ (2) 芸能・音楽」、第3章 川原神社 5 芸能・音楽」、兵庫県教育委員会編『丹波の曳山祭礼—波々伯部神社と川原神社をめぐって—』、平成19年度文化庁ふるさと文化再興事業伝統文化総合支援研究委嘱事業実施報告書、兵庫、兵庫県教育委員会、pp.56-59、71-75、97-105
- \* 2008.06.19 調査報告「京都祇園祭り 放下鉦の囃子」、祇園囃子アーカイブズ、伝音アーカイブズ、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・webサイト、<http://jupiter.kcu.ac.jp/jtm/archives/resarc/gionbayashi/houkaboko/index.html> (webサイト改訂版)
- \* 2008.10.30 調査報告：奈良市教育委員会報告書編集、三隅治雄・大島嘸雄・吉田純子編『奈良の民俗芸能』、日本の民俗芸能文化調査報告書集成 補遺2、東京、海路書院（「第1章 六斎念仏」、第3章 語りもの・その他」の分担執筆および岩井宏實・廣井榮子との共同執筆、pp.37-79、188-213
- \* 2009.03.31 調査報告「京都祇園祭り 船鉦の囃子」、『日本伝統音楽研究』第6号、pp.36-62
- \* 2008.03.31 解説「日本の伝統音楽・芸能 視聴覚資料ガイド」、久保田敏子・藤田隆則編『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽—』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 研究報告1、京都、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、pp.143-145
- \* 2008 解説「祇園囃子の特色」、『祇園囃子とわらべ唄』、財団法人祇園祭山鉦連合会制作、CDR-1、12センチCD-R
- \* 2008.08.31 書籍紹介「都市と祭礼研究会編『天下祭読本—幕末の神田明神祭礼を読み解く—』（神田明神選書1）』、『東洋音楽研究』第73号、pp.113-115
- \* 2008.03.31 エッセイ「祇園囃子における伝統と創造」、『藝文京』（京都市芸術文化情報誌）2008年（平成20年）7月1日・通巻106号（（財）京都市芸術文化協会）、pp.3-5
- \* 2008.03.31 討論参加記録：高松晃子編『伝統から創造へ2 日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 平成十九年度研究報告』、東京、日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業、「伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション—」、「芸術文化における〈伝統的なもの〉」グループ
- \* 2009.03.31 討論参加記録：高松晃子編『伝統から創造へ3 日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 平成二十年度研究報告』、東京、日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業、「伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション—」、「芸術文化における〈伝統的なもの〉」グループ

## ◆データベース

- \* 2009.03.10 「画像資料にきく『祇園囃子』」、伝音アーカイブズ、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・web サイト、[http://venus.kcuu.ac.jp/databases/zuzou\\_gionbayashi/](http://venus.kcuu.ac.jp/databases/zuzou_gionbayashi/)

## ◆口述活動

- \* 2008.11.29 研究発表「波々伯部神社祭礼と川原住吉神社祭礼の囃子」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 共同研究「ヤタイの祭りと囃子」、2008 年度第 3 回研究会、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室 1
- \* 2008.12.20 研究発表「園部の丹波祭囃子・質美の屋台囃子・口八田の屋台囃子の諸相」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 共同研究「ヤタイの祭りと囃子」、2008 年度第 4 回研究会、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 合同研究室 1
- \* 2008.07.05 講演「祇園囃子の歴史と特質」、佛教大学四条センター特別企画、佛教大学四条センター講堂
- \* 2008.07.03 解説「祭礼囃子の SP レコードをきく」、平成 20 年度上半期 伝音セミナー「日本の希少音楽資源にふれる—SP 盤にきく幻の音」第 3 回、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室 1

## ◆企画

- \* 2008.05.31 企画・司会・進行「祇園祭り 鶏鉦の囃子」、京都市立芸術大

学日本伝統音楽研究センター平成 20 年度第 1 回公開講座、京都芸術センター フリースペース、京都市立芸術大学主催、京都芸術センター共催

## ◆調査活動

- \* 京都祇園囃子調査
- \* 京都六斎念仏調査
- \* 坂越の船祭り調査
- \* 洛中洛外図・祇園祭礼図を中心とした祭礼図調査

## ◆教育活動

- \* 2008.09 ~ 2009.03 京都市立芸術大学美術学部非常勤講師

## ◆学内活動

- \* 将来構想推進委員会委員、同教育・研究部会委員、同効率的な大学運営部会委員、自己点検・評価委員会委員

## ◆対外活動

- \* 科学研究費補助金基礎研究 (B)「中国新疆ウイグル族において継承し展開する合奏音楽“ムカム”の音楽様式研究」研究代表者
- \* 人間文化研究機構連携研究員
- \* 日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究共同研究員
- \* 兵庫県文化財保護審議会委員
- \* 伝統文化総合支援研究委員会委員 (兵庫県)
- \* 独立行政法人日本芸術文化振興会文楽劇場短期公演等専門委員会委員
- \* 桑名石取祭の祭車行事保存伝承委員会

委員 (桑名市教育委員会)

- \* 坂越の船祭り総合調査団調査員 (赤穂市教育委員会)
- \* 所属学会: (社) 東洋音楽学会、日本オセアニア学会、日本音楽学会、民族芸術学会

### 竹内 有一

#### ◆著作活動

- \* 2008.03.31 企画・編集・共著『詞章本の世界—近世のうた本・浄瑠璃本の出版事情—』(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告2)、竹内有一編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、90pp.
- \* 2008.03.31 小論「序説 近世音楽史における詞章本とその出版」(同上所収)、pp.2-11
- \* 2008.03.31 小論「歌舞伎音楽における詞章本—上演から伝承へ—」(同上所収)、pp.33-38
- \* 2008.03.31 小論「稽古本の意義—浄瑠璃とせりふ—」(同上所収)、pp.54-57
- \* 2008.03.31 小論「音楽の行われる場 劇場空間」、『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽—』(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告1)、久保田敏子・藤田隆則編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、pp.16-21
- \* 2008.03.31 小論「音楽史への新しいアプローチ 近世における外来文化—「唐」「蘭」との出会い」(同上所収)、

pp.114-121

- \* 2009.01.12 資料『胡弓の謎を探る—その源流と魅力』(講座のコンセプト・17世紀の胡弓を描いた絵画例・関連年表ほか)、日本伝統音楽研究センター平成20年度第3回公開講座配布資料、12pp
- \* 2008.08.01 解題「秘曲・新曲サロン41 常磐津 浮む瀬の狸々」、『日本舞踊』第60巻8月号、pp.26-28
- \* 2008.06.10 エッセイ「邦楽 音の魅力で惹きつける」(特集 上方芸能12ジャンル—40年目の地平)、『上方芸能』第168号、pp.24-25
- \* 2008.04.20 レビュー「女流ならではの芸脈と伝承」、『京都芸術センター通信 明倫art』第96号、p.6
- \* 2008.09.20 レビュー「「伝統」への知を求める観客の渦」、『京都芸術センター通信 明倫art』第101号、p.7
- \* 2009.03.20 レビュー「忘れられた花街での『奇祭』」、『京都芸術センター通信 明倫art』第107号、p.7
- \* 2008.05.17 解説「懐月調」「秋」「千代の鶯」「将門」「出演者素描」、第24回舞踊・邦楽公演「新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会」公演パンフレット、国立文楽劇場

#### ◆口述活動

#### ◇調査研究

- \* 2008.08.06 研究報告「近世随筆の中の胡弓—大槻文彦が収集・考察した近世の言説と絵画—」、共同研究「胡弓の源流と受容—東西交渉の視点を中心

に一」、日本伝統音楽研究センター合同研究室

- \* 2008.09.22 資料紹介「派生的展開—越中おわら節、伊勢音頭—」、同上
- \* 2008.11.29 資料紹介「京都、もう一つの花街—五條楽園歌舞練場へようこそ—」、プロジェクト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問題」、日本伝統音楽研究センター合同研究室
- \* 2009.03.27 研究プレゼン「豊後三流のオトシー表象と認識の変遷—(仮題)」、プロジェクト研究「歌と語りの言葉と「ふし」の研究日本伝統音楽研究の視点と方法」、日本伝統音楽研究センター合同研究室

\* 2008.12.10 講演「日本音楽とその音響空間—演奏者・聴取者の視点から—」、第12回関西木造劇場研究会、徳正寺

\* 2009.01.12 解説「序説—胡弓の源流と受容—」、日本伝統音楽研究センター平成20年度第3回公開講座「胡弓の謎を探る—その源流と魅力—」、日本伝統音楽研究センター合同研究室1

\* 2008.06.05 構成・解説「花街のうたを聴く—近代日本の女性ボーカリストたち—」、2008年度第2回伝音セミナー、日本伝統音楽研究センター合同研究室

#### ◇プロデュース

\* 2008.04-2009.03 共同研究「詞章本とその出版に関する研究」(全5回、オプシオン企画全2回)、日本伝統音楽研究センター(詳細別掲)

\* 2009.01.12 企画・司会「胡弓の謎を探る—その源流と魅力—」、日本伝統

音楽研究センター平成20年度第3回公開講座、日本伝統音楽研究センター合同研究室1

#### ◇教育・講習

\* 2008.10～2008.12 日本伝統音楽研究センター連続講座「近世芸能の資料—三味線音楽に親しむ秘訣—」(日本伝統音楽の資料を読む—伝統芸能をよりよく鑑賞するために—(後期))(全10回)、日本伝統音楽研究センター合同研究室

#### ◇新聞取材

\* 2008.06.04 「花街の音楽SP盤で聴く」、『朝日新聞』第2京都版、朝刊 p.25

#### ◆調査・取材活動

\* 随時 詞章本出版物(浄瑠璃本・うた本)等の書誌調査およびデータ作成

\* 随時 和本の市場調査およびその収集・保存・公開に関わる調査(古書店、古書市、ネットオークション等)

\* 随時 歌舞伎・文楽・邦楽・日本舞踊等の公演・稽古における演奏手法や伝承実態等の調査

\* 随時 演奏者に関わる史蹟・墓碑、およびその記録・文書類の基礎調査

\* 2008.06.23 金峯山寺蔵廻船入港図額の熟覧・撮影(奈良県吉野郡)

\* 2008.09.02-04 越中おわら風の盆における芸能伝承調査(富山県富山市八尾町)

#### ◆演奏活動

\* 2008.05.17 第24回舞踊・邦楽公演「新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会」、

常磐津「将門」の浄瑠璃演奏、国立文楽劇場

藤田 隆則

- \* 2009.01.07 NHK-FM「邦楽のひととき」、常磐津「どんつく」の浄瑠璃演奏
- \* 2009.01 寿初春大歌舞伎、常磐津「廓文章」の浄瑠璃演奏、大阪松竹座
- \* 2009.02 二月花形歌舞伎、常磐津「蜘蛛糸梓弦」の浄瑠璃演奏、大阪松竹座

◆学内活動

- \* 広報委員会委員、同電子・印刷メディア小委員会委員
- \* 情報管理委員会委員、同ネットワーク管理運営部会委員、同情報スペース運営部会委員
- \* 2009.01 編集協力『芸大通信』（特集「京都芸大新研究棟 高度研究の「発信基地」」第11号、8pp

◆対外活動

- \* 国際日本文化研究センター共同研究「民謡研究の新しい方向」共同研究員
- \* (社) 東洋音楽学会 理事
- \* 楽劇学会、近世文学会、藝能史研究会、歌舞伎学会、国際浮世絵学会、洋学史研究会、長野郷土史研究会、関西木造劇場研究会 各会員
- \* 洋楽流入史研究会 事務担当
- \* 常磐津協会 正会員
- \* 大学コンソーシアム京都セカンドアカデミー講師

◆著作活動

- \* 2008.03 久保田敏子との共同編集『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2008年3月、全160p
- \* 2008.03 単著エッセイ「身体による伝承と習得—古典音楽を中心に」、久保田敏子・藤田隆則（共編）『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2008年3月、pp.33-37
- \* 2008.03 単著エッセイ「謡—能の音曲」、久保田敏子・藤田隆則（共編）『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2008年3月、pp.66-74
- \* 2008.04 単著エッセイ「歌い手・語り手がつなぐ中世、近世、今」、『京都芸術センター通信』96号(2008年5月号)、2008年4月、1p
- \* 2008.07 単著エッセイ「独吟が生む呼吸の、そして陰翳のドラマ」、『京都芸術センター通信』99号(2008年8月号)、2008年7月、1p
- \* 2008.08 単著エッセイ「『化身』だと意識していない前シテもいるのでは」、『能』（京都観世会館）2008（平成20）年8月号（通巻603号）、1p
- \* 2008.10 単著論文 "No and Kyogen: Music from the medieval", In Alison

McQueen Tokita and David W. Hughes (eds.) *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. (Aldershot, England: Ashgate Publishing Ltd., 2009), translated by Alison Tokita, pp. 127-144

- \* 2008.12 単著エッセイ「季語とともに生きる」、『京都芸術センター通信』104号(2009年1月号)、2008年12月、1p
- \* 2009.01 単著小論文(事典項目)「踊る」、日本文化人類学会(編)『文化人類学事典』丸善、2009年1月、頁未詳
- \* 2009.01 単著小論文(事典項目)「歌う・誦んじる」、日本文化人類学会(編)『文化人類学事典』丸善、2009年1月、頁未詳
- \* 2009.02 編集『幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成20年度第4回公開講座、当日配布パンフレット、2009年2月6日-7日、全30p(このうち単著エッセイ「開催の趣旨」「能のクセと幸若舞の舞い方の共通点」を執筆)

#### ◆口述活動

- \* 2008.2.15 コメント「能管と西洋管弦楽との統合、そして超越」、日文研・伝統文化芸術総合研究プロジェクト講演会「邦楽と西洋音楽を超えて」、京都市、国際日本文化研究センター
- \* 2008.5.8 音源内容解説「明治大正期の能の名手たち」(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター伝音セミナー、第1回、京都市、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1)
- \* 2008年5月-7月(毎週水曜日、全10回) 伝統音楽連続講座「日本伝統音楽の資料を読む」、平成20年度前期「中世芸能の資料-能をよりよく鑑賞するための背景として」、京都市、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- \* 2008.6.22 講演(日曜講演)「何のために声をはっし、名をとなえるのだろうか?」、京都市、本願寺聞法会館
- \* 2008.7.8 パネルにおける小発表「節談が伝える御法義—その歴史的再評価と音声力の可能性」、本願寺文化シンポジウム、京都市、本願寺聞法会館
- \* 2008.7.19 研究発表「大江幸若舞の復元・暗誦手法-範列化・組織化・ルーティン化・冗長性」、日本音楽学会関西支部例会、福岡市、西南学院大学
- \* 2008.12.27 研究発表「物語を暗誦する民俗芸能-その実際・その意味」、科研研究成果発表会(「身体化された心の人類学的解明(基盤研究A、代表:菅原和孝)」)、京都市、京都大学
- \* 2009.2.6 発表「幸若舞の伝承と復元—主として音曲の構造に注目して」、日本伝統音楽研究センター主催平成20年度第4回公開講座「幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉」イベント、京都市、京都市立芸術大学
- \* 2009.2.27 講演「音声の役割について」、本願寺備後教区布教団部門別研修会、福山市、本願寺備後会館
- \* 2009.3.14 研究発表「京観世の謡いぶり—録音、謡本、伝書から」、能楽学

会第12回能楽フォーラム「謡と謡本 - 京観世の謡」、神戸市、神戸女子大学

山田 智恵子

◆プロデュース活動

- \* 2008.2.6-7 「幸若舞に能の源流をみる - 中世芸能の伝承と復元 (敦盛)」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成20年度第4回公開講座、京都市、京都市立芸術大学およびウィングス京都イベントホール

◆調査・取材活動

- \* 継続中 福岡県みやま市瀬高町大江の幸若舞にみられる口頭構成法の調査
- \* 継続中 謡曲・能の囃子の伝承にかかわる調査

◆学内活動

- \* 附属図書館・芸術資料館運営委員会委員
- \* 京都市立芸術大学美術学部非常勤講師 (2008.04-2008.09)

◆対外活動

- \* 本願寺教学伝道研究センター委嘱研究員
- \* 日本音楽学会機関誌編集委員
- \* 神戸女学院大学音楽学部非常勤講師 (2008.09-2009.03)
- \* 滋賀大学教育学部非常勤講師 (2008.04-2008.09)
- \* 所属学会: 日本音楽学会、楽劇学会、(社) 東洋音楽学会、能楽学会、International Council for Traditional Music, Society for Ethnomusicology

◆著作活動

- \* 2008.03.29 単著「義太夫節」、小島美子監修、国立劇場企画・編集『日本の伝統芸能講座 音楽』、京都、淡交社、pp.308-332
- \* 2008.10 単著 “*Gidayu-bushi: music of the bunraku puppet theatre* (Translated by Alison Tokita)”, Alison McQueen Tokita, David W. Hughes eds. *The Ashgate Research Companion to Japanese Music* (SOAS Musicology Series), Hampshire, England, Ashgate Publishing, pp.197-227

◆口述活動

- \* 2008.10.02 音源内容解説「明治期の長唄と義太夫節をきくーレコードと楽譜の接点」(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター伝音セミナー第5回)、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1
- \* 2008.11.25 解説「義太夫節と『一谷嫩軍記』」、日本音楽史Ⅱ公開授業「芸大で聴く義太夫節」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1
- \* 2008.12.04-07 コメンテーター「戦間期(1918-1938)の大阪の音楽と近代」シンポジウム、国際日本文化研究センター
- \* 2008.12.21 司会・解説・パンフレット作成「清元と創作舞踊」、神戸市立東灘区民センター小ホール

## ◆調査活動

- \* 2008.09.08 豊竹嶋大夫師へ「十種香」の演奏をめぐるの聞き取り調査。国立劇場にて
- \* 2008.10.12 国指定重要無形民俗文化財「題目立」調査。奈良市上深川町

## ◆学内活動

- \* 附属図書館・芸術資料館運営委員会委員
- \* 京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師  
(2008.04.01 ~ 2009.03.31)

## ◆対外活動

- \* 東洋音楽学会機関誌編集委員
- \* 楽劇学会機関誌編集委員
- \* 独立行政法人日本芸術文化振興会  
第23期文楽研修講師
- \* 所属学会: 日本音楽学会、東洋音楽学会、  
楽劇学会
- \* 清元協会会員

吉川 周平

(平成19年度補訂)

## ◆著作活動

- \* 2008.03.01 エッセイ「1000字エッセイ: 京都の春秋と盆おどり」、『日本芸術文化振興会ニュース』平成20年3月号、p.15
- \* 2008.03.26 解説「呼び戻される古典箏曲の世界」、CD「安藤政輝 箏の世界3」、日本伝統文化振興財団、VZCG-659

- \* 2008.03.31 対談「〈所長対談〉山路興造先生にきく—日本伝統音楽と民俗芸能」、山路興造との共著、『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所報』第9号、pp.3-25

## ◆公開講座用資料集作成

- \* 2008.02.10 『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 平成19年度第3回公開講座 吉川周平所長退任記念 松囃子—足利義教が高めた芸能のかたちと意味—』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、34pp.

## ◆口述活動・プロデュース活動

- \* 2008.02.10 講演「日本伝統音楽・芸能と日本文化の特質—松囃子を中心に」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 平成19年度第3回公開講座「吉川周平所長退任記念 松囃子—足利義教が高めた芸能のかたちと意味—」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、ウィングス京都イベントホール

## ◆学内活動

- \* 評議員、将来構想委員会、自己点検・評価委員会、全学広報委員会、国際交流委員会、安全衛生委員会、日本学生支援機構奨学金返済免除候補者選考委員会の各委員会、京都市立芸術大学芸術教育振興協会評議員、同理事



## 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 概要 2008

### 設立の理念

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指し、2000年に設立されました。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に受け継いできている日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものであり、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を研究し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

### 主な活動内容

- ◆資料の収集・整理・保存
  - \* 文献資料（図書、逐次刊行物、古文獻、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む）
  - \* 音響映像資料
  - \* 楽器資料
  - \* 絵画資料
  - \* データーベースなどの電子資料
- ◆日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究
  - \* 専任教員による個人研究
  - \* 非常勤講師（特別研究員）による特定のテーマの研究
  - \* 外部の研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究（「委託研究」）
- ◆日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究
  - \* 国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究活動（「プロジェクト研究」「共同研究」）
  - \* センターが外部と共同して行う調査研究
- ◆活動成果の社会への提供
  - \* 市民向け公開講座・セミナー等の開催
  - \* 紀要・所報・資料集成などの学術出版物の発行
  - \* 電子メディアによる情報発信

## 研究の視点と領域

- ◆伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみすえる
- \*明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承
  - <古代> 祭祀歌謡と芸能（楽器等の考古学的遺物を含む）
  - <上代・中古> 仏教音楽（声明等）宮廷の儀礼・宴遊音楽（雅楽等）
  - <中世> 仏教芸能（琵琶、雑芸、尺八等）武家社会の芸能（能・狂言等）流行歌謡（今様、中世小歌等）
  - <近世> 外来音楽（切支丹音楽、琴楽、明清楽）劇場音楽（義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等）非劇場音楽（地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等）流行歌謡（小唄、端唄等）
- ◆近代社会での伝統音楽の展開をみすえる
- \*伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究
- \*伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究
- ◆広い視野で生活の音楽をみすえる
- \*民間伝承と日本関連諸地域及び先住民の音楽・芸能の研究
- \*生活における音楽・芸能（わらべうた・民謡、祭礼音楽等の民俗芸能）の研究

## スタッフ

## ◆専任教員

- 所長：久保田敏子（日本音楽史学）  
 「邦楽の歴史的音源に関する研究」  
 「地歌・箏曲の作品研究」

- 教授：後藤静夫（芸能史・文化史）  
 「人形浄瑠璃・文楽の実態研究」「芸能の伝承研究」「座敷カラクリ研究」  
 教授：山田智恵子（音楽学・日本音楽史）  
 「義太夫節の音楽学的研究」  
 「劇場系三味線音楽の比較研究」  
 准教授：田井竜一（民族音楽学・日本音楽芸論）  
 「山・鉾・屋台の囃子の比較研究」「六斎念仏の研究」  
 准教授：竹内有一（日本音楽史学）  
 「関西における江戸音曲の伝承」「近世・近代の京都と音楽文化の諸相史」  
 准教授：藤田隆則（民族音楽学）  
 「中世の歌と語りの作曲法」「能・狂言の演出史」「古典／儀礼音楽の伝承形式研究」

## ◆非常勤講師

- 家塚智子（特別研究員）  
 今田健太郎（特別研究員）  
 上野正章（特別研究員）  
 大谷（寺田）真由美（特別研究員）  
 東正子（情報管理員）

## ◆非常勤嘱託員

- 齊藤尚（司書・学芸員）  
 上田学（研究補助員、12月まで）  
 木村知美（研究補助員）  
 小城篤子（研究補助員、1月より）  
 福井善子（研究補助員）

## 沿革

- 平成3年6月 世界文化自由都市推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を訴える。  
 平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設に

についても研究する」と言及。

平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される。

平成8年12月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる。

平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費 予算措置

平成10年4月 施設建設費 予算措置

平成10年10月 施設建設着工（工期17ヶ月）

平成11年9月 日本伝統音楽研究センター 設立準備室を設置する（室長：廣瀬量平名誉教授）。

平成12年2月 新研究棟竣工

平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝

統音楽研究センター開設

廣瀬量平名誉教授が初代所長に就任

平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟完成披露式挙行

平成16年4月 吉川周平前教授が第二代所長に就任

平成20年4月 久保田敏子前教授が第三代所長に就任

## 施設

新研究棟6～8階（総面積約1,500㎡）

6階 センター所長室、資料室、資料管理室、閲覧室、個人研究室

7階 合同研究室2、楽器庫、貴重資料庫

8階 個人研究室5、研究員室2、視聴覚編集室、研修室2



---

## 編集後記

所報 10 号をお届けします。前号に予告しましたように、今回より年度末にあわせて原稿を整え、6 月に発行することといたしました。

3 頁に記しましたように、昨年は、初代所長の廣瀬量平先生が亡くなられるという、まことに悲しく残念なできごとがありました。先生をしのぶ気持ちを今後の研究活動に繋げるために特集を組み、多くのかたから原稿を頂戴しました。この場を借りて御礼申し上げます。

来年 2010 年度は、京都市立芸術大学および日本伝統音楽研究センターは大きな節目を迎え、大学の 130 周年記念事業・センター創設 10 周年記念として、当センターの企画により、いくつかのイベントを計画しています。

編集委員 竹内有一

京都市立芸術大学  
日本伝統音楽研究センター 所報 第 10 号  
2009 年 6 月 30 日発行  
編集者 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター  
発行者  
〒 610-1197 京都市西京区大枝杓掛町 13-6  
電話 075-334-2240  
FAX 075-334-2241  
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp  
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>  
印刷所 株式会社 田中プリント

### Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts  
13-6 Ooe Kutsukake-choo, Nishikyoo-ku  
Kyoto-shi, 610-1197, Japan  
Tel +81-75-334-2240  
Fax +81-75-334-2241  
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp  
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

---

